













進むと瓜保をさす一は皇后親く艦をたよるなまの天神  
 地をたよるくけのたのん方を導くもあらずくは  
 とくは中ねに投しあひ其屍をさすく進みくあつた  
 いも安くと漕はまきくはつらつたはたつた  
 皇后別をさすくはつたもなまの神  
 あつたは必死の危難免くはあつた神をさすくは  
 あつたは別をさすくはつたもなまの神  
 眞助ありくは瓜保く感くもあつたは神  
 某の祖神にまきくは皇后の妊娘のは此をさすくは  
 らもなまの瓜保く感くもあつたは神  
 赤白の帯下れたくはもあつたは神  
 とくは親帯帛とくはもあつたは神  
 響のなまの瓜保く感くもあつたは神

則共とくは瓜保をさすくは皇后親く艦をたよるなまの天神  
 平金ももなまの瓜保をさすくは皇后親く艦をたよるなまの天神  
 韓圃ももなまの瓜保をさすくは皇后親く艦をたよるなまの天神  
 うそく皇太子に目まもあつたは神  
 流恙ももなまの瓜保をさすくは皇后親く艦をたよるなまの天神  
 致あももなまの瓜保をさすくは皇后親く艦をたよるなまの天神  
 猶ももなまの瓜保をさすくは皇后親く艦をたよるなまの天神  
 二月二日の日瓜保をさすくは皇后親く艦をたよるなまの天神  
 霊とりて合を記り  
 神とくは瓜保をさすくは皇后親く艦をたよるなまの天神  
 て加を乗つた大羽神とくは瓜保をさすくは皇后親く艦をたよるなまの天神  
 弾後而至る世御ももなまの瓜保をさすくは皇后親く艦をたよるなまの天神  
 め倉生病也つとくは瓜保をさすくは皇后親く艦をたよるなまの天神







能備堂

能備堂の神あり

○奉き屋空藏菩薩

去外

○服士

昆沙門天

昆沙門天の像あり

○日不動明王

日不動明王の像あり

○此堂の神あり

○此堂の神あり

友乃嶋

友乃嶋の神あり

友乃嶋の神あり

友乃嶋の神あり

友乃嶋の神あり

友乃嶋の神あり

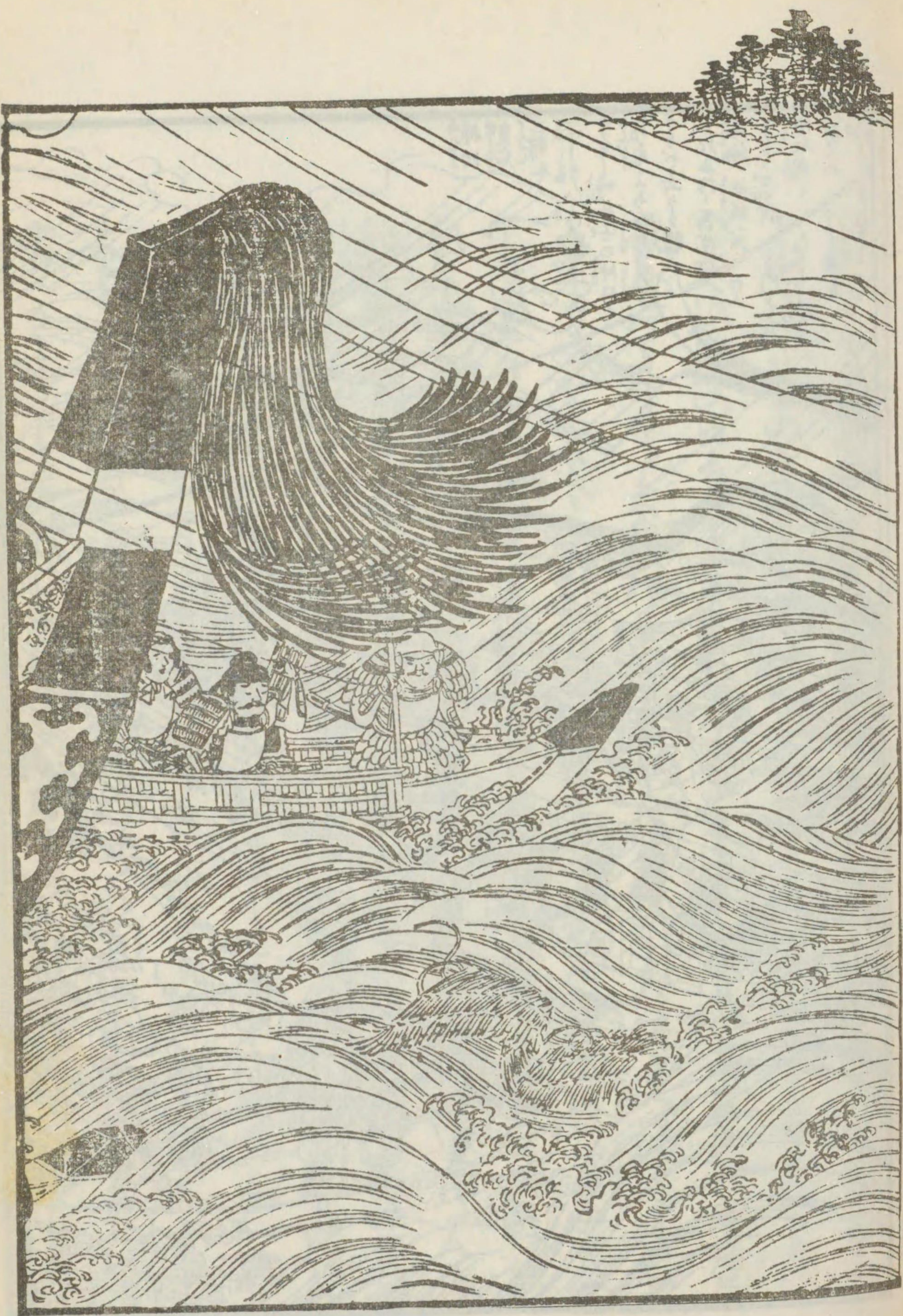
友乃嶋の神あり

友乃嶋の神あり

友乃嶋の勝景なるやたしく神仏の出揃へて敷て敷に  
按るりのふもあつとあり常く役の角公は此島を護るに  
縁糸神護道ののり亦とあつとあり今にてもくを護るに  
の配下家に於て修りてあんとあつとあり其の  
敷く二つあり地島沖を神島あり其形をいふ地島沖の  
いる乃翼を供する勢とありて敷へ左太乃肩の人の面あり

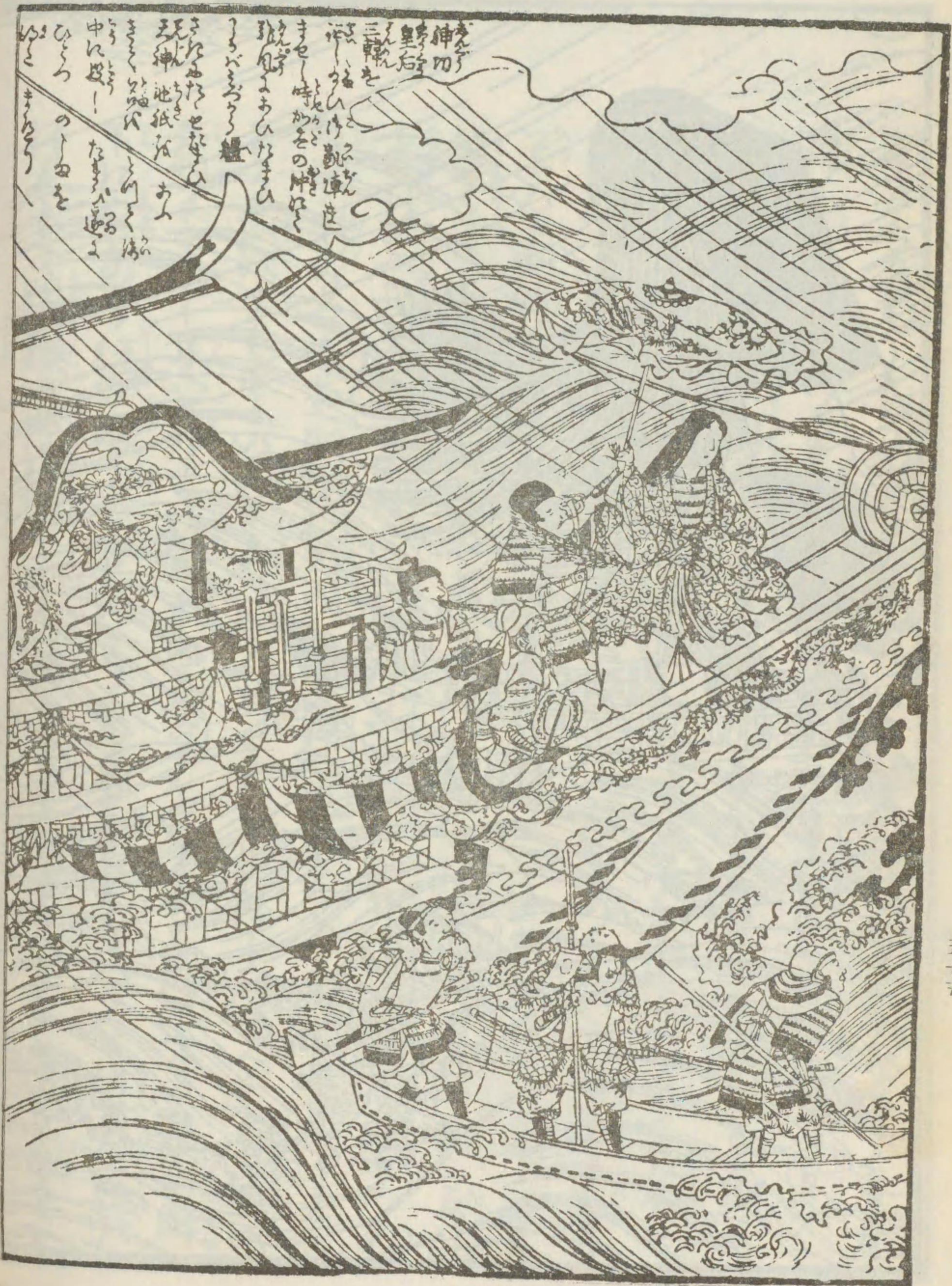
ごくあり神の其眉のうへに黒子と伝へんとてや西南  
乃こた後出たり先加なる舟をすし其の半の首ありて  
上る亦の若き地島あり陸ありとありてさつとありて  
島の周囲を二里にわたりてあつとありて其の島の  
難樹ありは風は掃くも各月送の趣とありて時々海風に  
後くも風益なるを食ふとありて其の島の島の島の島の  
敷国金崎眠處なる諸島ありとありて未奇絶くもつた規  
畫く乃ち沖をふりて其の間相車とありて其の島の島の島の  
に敷くも鼓怒くも以て海をすし混濁して濁すけり  
潰獲たる其の島は百千の迅雷とありて其の島の島の島の  
さるさるの尾の島はさるさるの島ありて其の島の島の島の  
らんして是の島をいふに敷て其の島の島の島の島の島の  
船が島した一斤の大石と長と二十切とありて其の島の島の島の





こころにありありと下におもひてくはるるのまぢりて  
 海に舟りてつらふまぢりてくはるるのまぢりてくはるるのまぢりて  
 しりてつらふまぢりてくはるるのまぢりてくはるるのまぢりて  
 踏ぐ手の攀ぢたるも唯とつらふまぢりてくはるるのまぢりて  
 凡誰う後あるものもあつてんやあるものもあつてんや  
 羊のごとく幾く雲く我れはより成る母とりある明夢見のつと  
 徐く風く地めし辛くして其絶頂を極るは但見石面なる  
 五竹林寂生穢悪観念崖岸岳岳閑伽井深地地知地去の教  
 字と彫るる是則圓初の時 南無の今ふらてまはばあ  
 ころ亦くくはるるのまぢりてくはるるのまぢりてくはるるのまぢりて  
 翁くくくはるるのまぢりてくはるるのまぢりてくはるるのまぢりて  
 下に穴あり極くくはるるのまぢりてくはるるのまぢりてくはるるのまぢりて  
 凡くくはるるのまぢりてくはるるのまぢりてくはるるのまぢりて





二丈いりり碑あつて立ちしは曼親王の筆一あふ其凡却ちふ  
 して雅致あり西山の方にもした様なる狻猊の乳もくたるの  
 いまは崖ののまり上芳夫のまをてまふ余おもひまふく下廻  
 潭澄つたりてま泉のりり一試に杖とたてて大湯とまふ  
 りあり登ちて入る坤軸のくくく一巻をまふ出たふと入  
 て湯とまふ崖と入るにまふとまふ外の方には竹のりり  
 舟もまふ地とまふ早の崖もまふりりこの御樂殿とやんり  
 舟もまふにちりり一もまふりり舟もまふりりこの崖の北  
 畔にまふりりこののりり乃徒の行謂阿と称とまふりり  
 南ふりりこの二百歩斗に巨石林とまふりり海中に立ちまふりり  
 ぐりりてまふりり真まふりりまふりりこの十ヨ舟もまふりり  
 大ある穴もまふりり其の穴荒れ乃あふりりあふりりくおれ  
 あふりりく一あふりり名品の崖もまふりり乃若乃徒の称もく















之北畔上下為破裂狀者曰瀾怒濤噴兩水齧野致也南下  
尋巨靈一擘裂者為序品窟其廣才右可容人其高摩葛上十  
以入則恢恢乎有餘地其始正黑序品第一窟而進神定而見  
物側于崖樹碑題曰妙法華經序品第一窟而進神定而見  
落有倒石噬于崖腹曰熊經而許步得滿越地名也一島中  
前六尺西南則一山可越山所許以有滿越之名也一島中  
如駝背橐多石少壤不越山所許以有滿越之名也一島中  
歷指播棋諸山鮮淡如畫今聚掌唯松樹數株環之可上東  
阻也南下得網如井之陷不存有碑記耳自網伽而居無  
神島懸崖腹其然板緣而上者若龜曝其奮然款立而仰  
者若將軍之虎攬幽之項應接不暇神島迴又三王仙步其  
羊南岑蔚名神池在良位土人傳言角仙得神劍之所謂步  
島者少彥名神池在良位土人傳言角仙得神劍之所謂步  
布浦與神島隔一帶舟過其間有臺備洲合祀神功皇云  
半里得蛇潭壑谷欲探蛇穴者鄉導險難往乃止過  
木毒卉亂雜蹊欲探蛇穴者鄉導險難往乃止過  
山東北轉倚累出海中者為海瀨堆險難往乃止過  
島南界南對阿之牟島西接淡之良使人舉裳欲涉東拍  
百許步得道鳳崎山勢趨海波底皆石峭巖若冠若坐  
子似罔似白不可悉名狀似戰者若龍企者若巖若冠若坐  
道若鳳者愛其景居之故得名鵲巢山有鵲巢于巖上懸不可

下榜不可北上據險自王避害周防不特擊且貪念可謂智而  
點者夷石北二不步得女濱海石名也五斗崖多秀石  
稍平夷石北二不步得女濱海石名也五斗崖多秀石  
上步障生松冬夏蔚然北折取路土山頗平行無奇石得  
錦步障生松冬夏蔚然北折取路土山頗平行無奇石得  
馬深蛇池徑馬入無異觀乃上舟北行一里大羊里得蒲  
有深蛇池徑馬入無異觀乃上舟北行一里大羊里得蒲  
寶簫管之具若誤觸其怒則蓬粉矣有護摩場故遊友島者不  
來得法有碑在池心多蒲州沮洳打之蓋履之則陷覽步而  
進得法有碑在池心多蒲州沮洳打之蓋履之則陷覽步而  
此云余嘗聞之故老之言友島古曰吉島神功后征三韓歸  
也廣坂忍熊二風子謀反拒后於住吉島神功后征三韓歸  
出南海依颺我師可濟神波起蛟龍夾船挽折不蓋裂以知所  
乃所流而往止于島後或謂之靴島又為友島蓋以方神之所  
其也名其地曰苦島後或謂之靴島又為友島蓋以方神之所  
吾曰公思鳥之奇也俾能畫者或曰以二島為命文其境為  
記夫友島之顯于南海也始於神后盛於小角而文其境為  
獨有之南龍公而紹其緒以雅馴其時不才唯私竊謂不  
李氏之南龍公而紹其緒以雅馴其時不才唯私竊謂不  
侍左不日先公也善書鳴于一時不才唯私竊謂不  
後敢不謹以久雖不能敵李氏之才幸浴右文之澤私竊謂不  
友鳥既歸紀遊事以上

新物採  
月  
後  
紀  
遊  
事  
以  
上





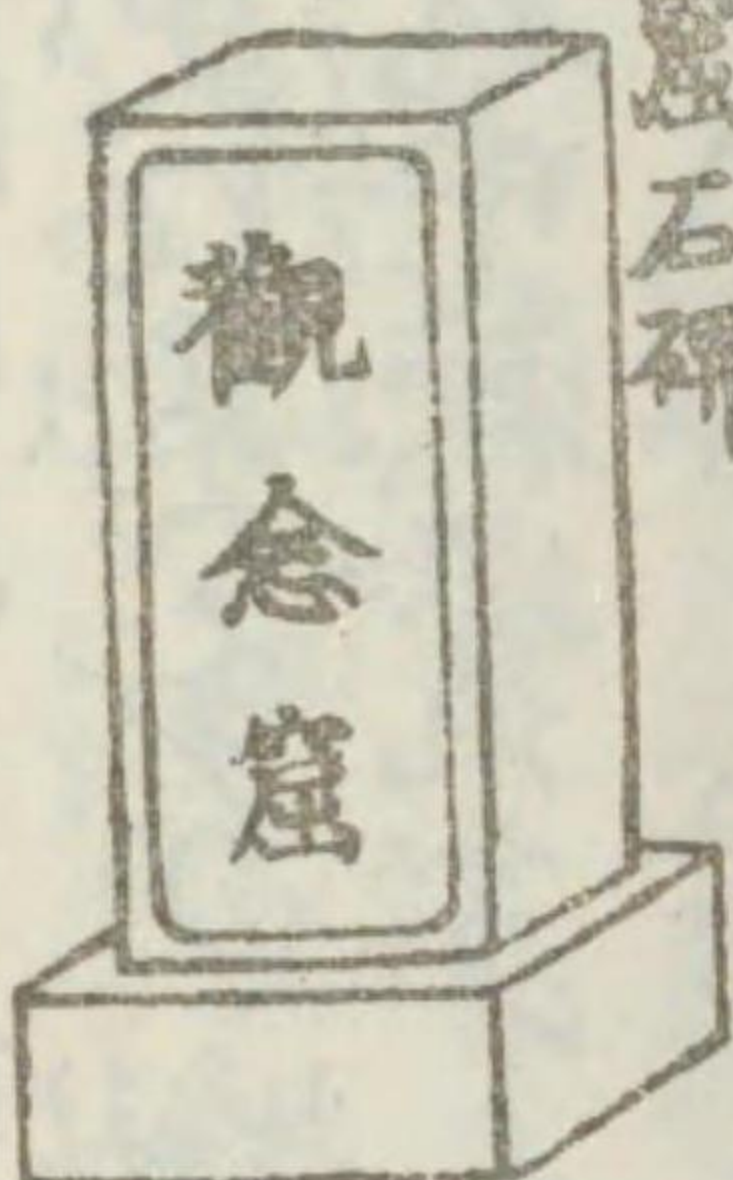


友嶋五所石碑之圖

類五所友嶋

禁殺生穢惡  
友嶋五所  
觀念窟  
序品窟  
闕伽井  
深蛇池  
劍池  
寛文九巳酉 雕

觀念窟石碑



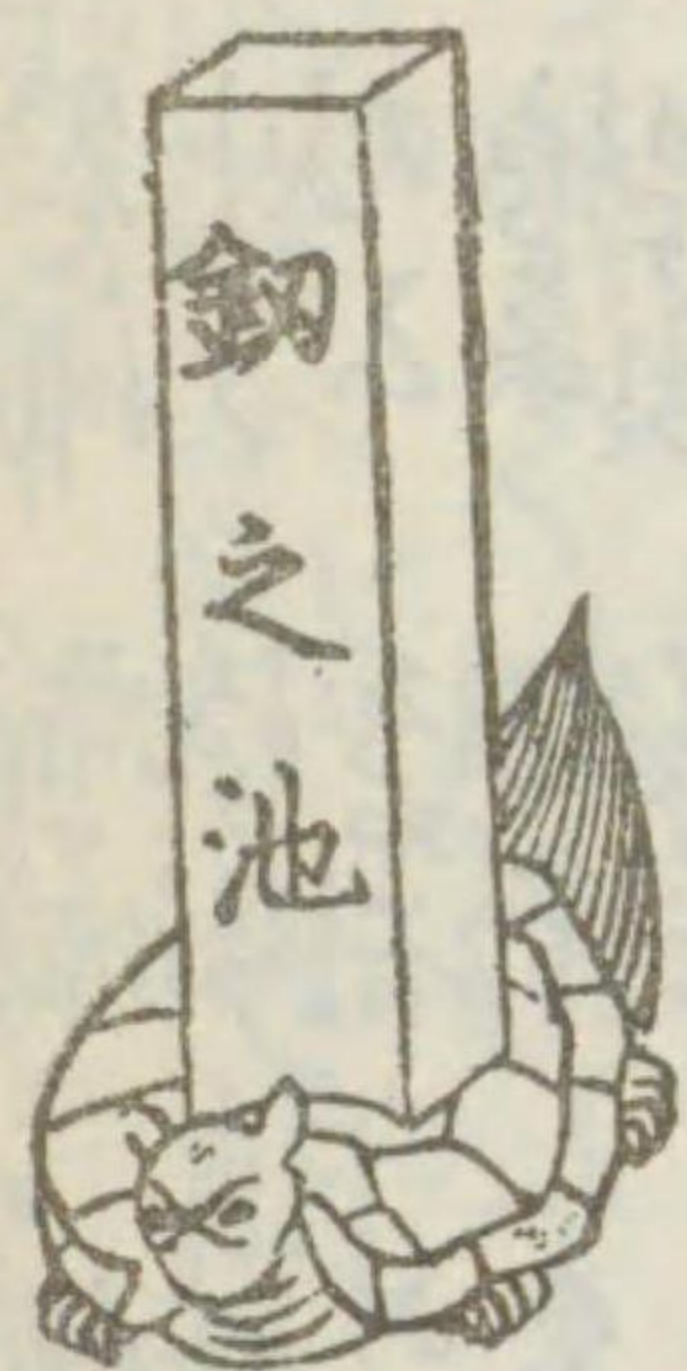
闕伽井石碑



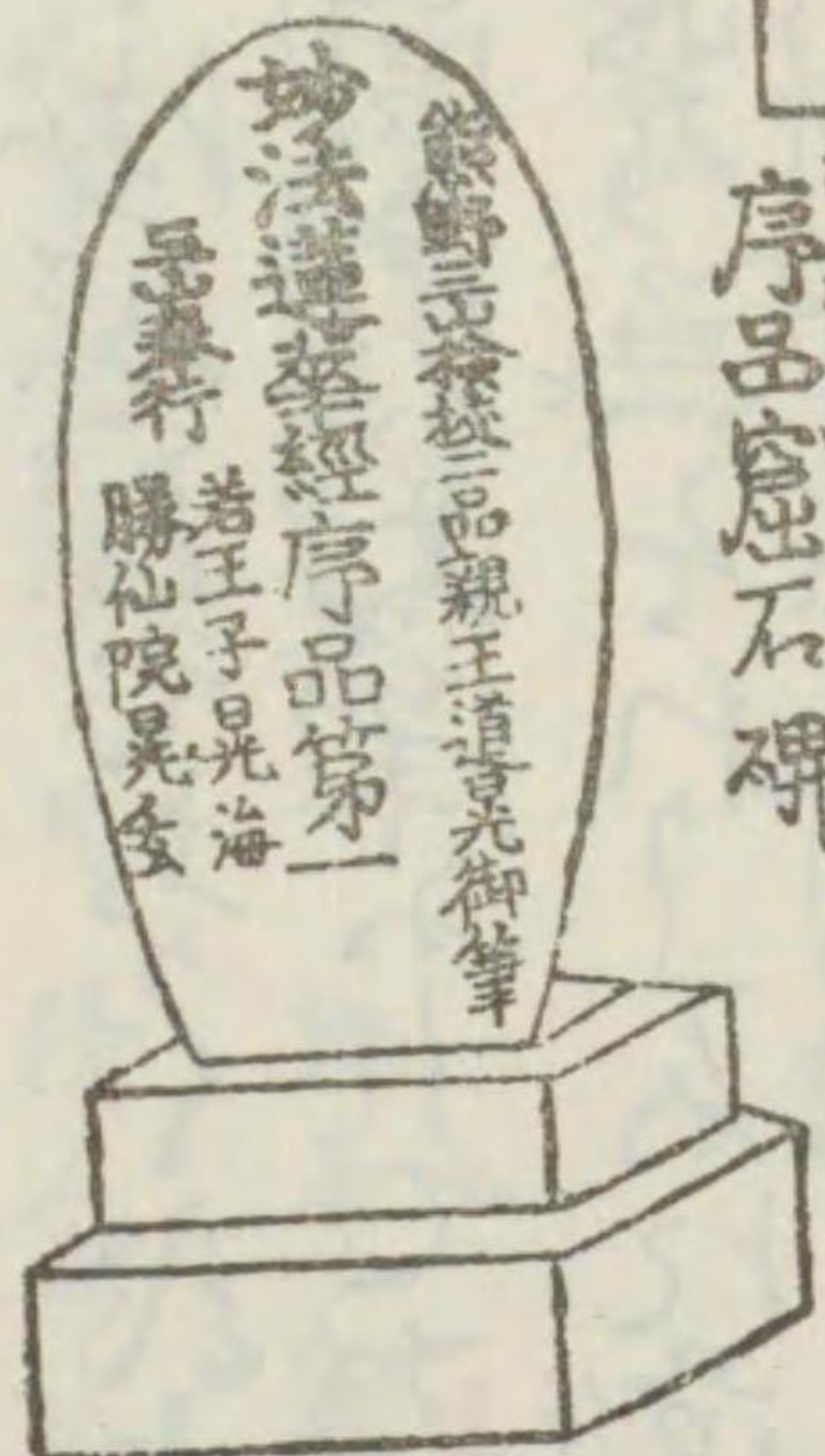
深蛇池石碑



劍池石碑



序品窟石碑





沖の宥小名

右近石 緑谷 小浦 相ヶ浦 地ヶ浦 亀ヶ浦  
 子持石 長谷 小浦 相ヶ浦 地ヶ浦 亀ヶ浦  
 平ヶ浦 大浦 小浦 相ヶ浦 地ヶ浦 亀ヶ浦  
 神島 小浦 大浦 小浦 相ヶ浦 地ヶ浦 亀ヶ浦  
 公重たふ 小浦 大浦 小浦 相ヶ浦 地ヶ浦 亀ヶ浦  
 飽等濱 小浦 大浦 小浦 相ヶ浦 地ヶ浦 亀ヶ浦

此浦かたの漁戸と云うたらば、海をみておろく式十尋  
 あつとい三十尋、おろく西の尾、南の大洋、おろく其船  
 長と疾し、さき此海に産する魚、おろく其に湯揺  
 口しきく、肉味、更なるあり、おろく其の魚、おろく其の骨、おろく其の  
 小真浦の漁人は、おろく其の魚、おろく其の骨、おろく其の

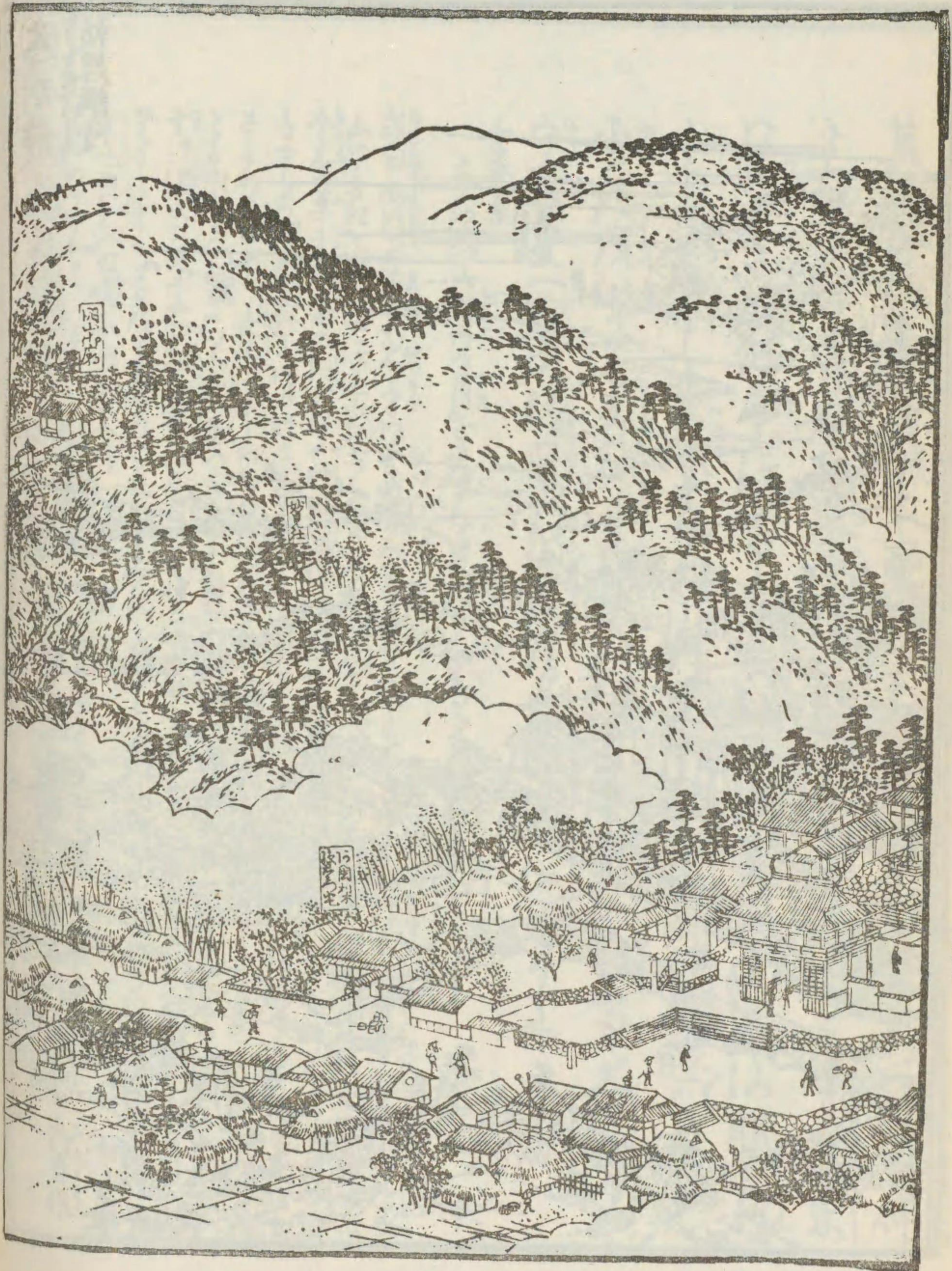
深

まて物、おろく其の魚、おろく其の骨、おろく其の  
 又、おろく其の魚、おろく其の骨、おろく其の  
 あ、おろく其の魚、おろく其の骨、おろく其の  
 際、おろく其の魚、おろく其の骨、おろく其の









園中文化の盛

平等の月夜

やんや

山

若小尼

傳泉

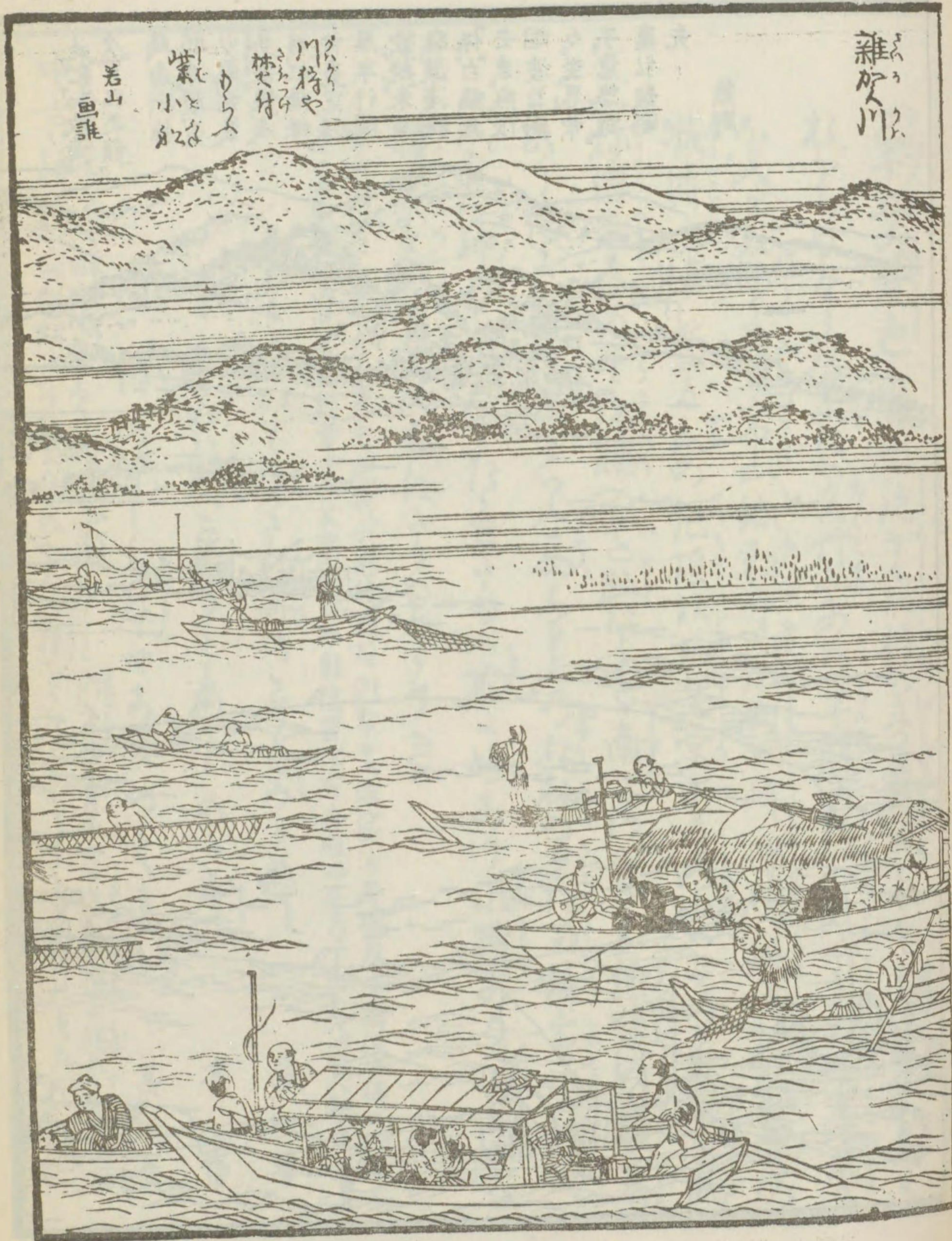












雑賀川

川持や  
林付  
紫小  
若山  
画誰

春日山地藏院光福寺

手平村にある。本尊、宇奈地地藏菩薩。大師の

大師堂

大師堂は、大師の坐す所。大師の坐す所は、大師の坐す所。大師の坐す所は、大師の坐す所。

大師堂の坐す所は、大師の坐す所。大師の坐す所は、大師の坐す所。大師の坐す所は、大師の坐す所。

大宅の松

大宅の松は、大宅の松。大宅の松は、大宅の松。大宅の松は、大宅の松。

小雑賀

小雑賀は、小雑賀。小雑賀は、小雑賀。小雑賀は、小雑賀。

雑賀川

雑賀川は、雑賀川。雑賀川は、雑賀川。雑賀川は、雑賀川。

宇治川といふ南にたがひ雑賀川といふ初夏のころより遠道

の諸人船すま暑風をこし夕暮のほ曇らるるに嘆して星の

結み付く中流にさう一泊したるよもあやの業をほこ

魚がわくまびたし彼流の船よりさし月もあやに面

白きくさくさうを中秋の月生石がさしうきく



波船和歌浦  
 次男弘美韻  
 扁舟一棹  
 弱浦隈多  
 少風光豈  
 易裁假浪  
 彩虹橋樣  
 絶書空斜  
 雁字行閑  
 欲撈未貝  
 底深淺幾  
 伴白鷗岸  
 去來無限  
 烟波目渺  
 々坐思帝  
 子意悠哉  
 崖弘毅剛  
 先



熊野

三千界の景色ありて流るに棹の音蕭條として玉津岩の夕也  
 松がらげなる東に名州山あり半服に籠三井公を割堂寺堂  
 をめぐらしたる愛宕山跡勒寺小町ヶ峰甲崎紙子松雜竹の  
 城墟よほれたる山の絶頂に妙見堂あり此山へののきを此  
 祢徳兩帝のを汝樓の基趾にそく南まほききく絶壁の巖石  
 あり信々仇羅ふらふ入共ふまを乃松林の中に玉津岩唱林乃  
 空右神々々々たる色々々々なるあり水榭あり南乃  
 勝景又區々にそきたるのありき

中言神社  
 田尻村西にあり多の生木に  
 日新宮とてたまるのたは無とうひらいてるんを  
 紹述先生文集曰自小貫生宅前小港放舫而到布曳海淺沙舟膠以手掬泥必得二三蛭子  
 遂差而食之小河豚上釣者多不中食既而輕陰雷作有舟而呼者乃下出丈人遺人馳東下暮  
 すしと舳へをくくあつめりめり  
 嵐 雪  
 涼 帝  
 其 角













其二

紀三井寺

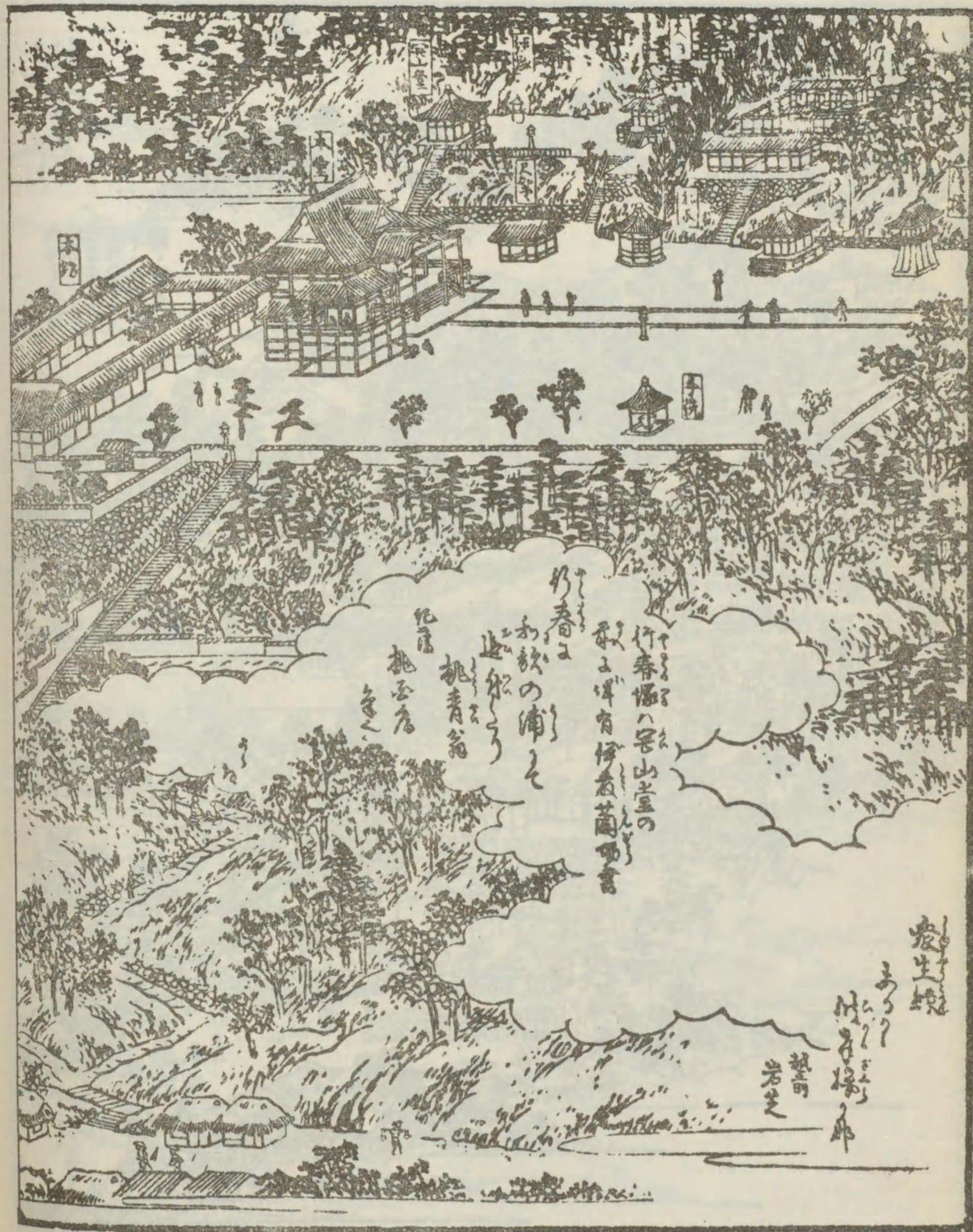
此寺は金剛  
 尊の御願  
 によりて  
 建立せり  
 といふ事  
 あり



明見社  
 財前山  
 考日社  
 根持所  
 紀三井寺  
 以

松待の  
 森  
 といふ  
 事あり

















仁馬津君浦  
眺む

海西南に漲く弘誓のつらんと示れ朝よの潮よる長夜に迷  
 るとねらう夕に山嵐深世の響きとそよよと津園  
 の勝の勢風がまひけ地は丹錫も留へかたけがりたるが  
 其夜よつらと物送の異えとそよよのつらよ上人あや  
 しとねらひはく馬のあやよつらとあひねたまよつら  
 出たると谷屋のこも手あるねねの千手観音はまほそ  
 御身より念えとけらとあひねたまよつら  
 上人あまりのかたそん嶺は頂供合掌一南無山と雲を焼  
 たるのねらう堂へはんいんいんあまのつらよ上人あや  
 のかたそん普門亦現の徳をかそよよとあひねたまよつら  
 のつらよとねらうとねらうとねらうとねらうとねらうとねらう  
 まのつらよとねらうとねらうとねらうとねらうとねらうとねらう  
 思ふとねらうとねらうとねらうとねらうとねらうとねらうとねらう















洋閣林樹起病花雨秀昌園一燈傳玉燄翠屏三  
井讓清涼滅神魏々金剛窟幸暉光明秘密藏。

神代塔山在昌國縣海中其八景中有浴伽燈火蓮洋古度天台翠屏山  
有三井山有藥樹傳是自龍宮來往歲本堂啓龍給衆緣

同

上野義則

朝試謝公展給園日未斜秋風吹佛合龍暗靄遠漢家  
窗外芭蕉樹帆前芦荻花山僧偏愛客海色上蒼翠

雨中帆舟望紀三井寺

然野老人

駐棹自從容依沙起佐饗霧晴悲閣出雨歛在家

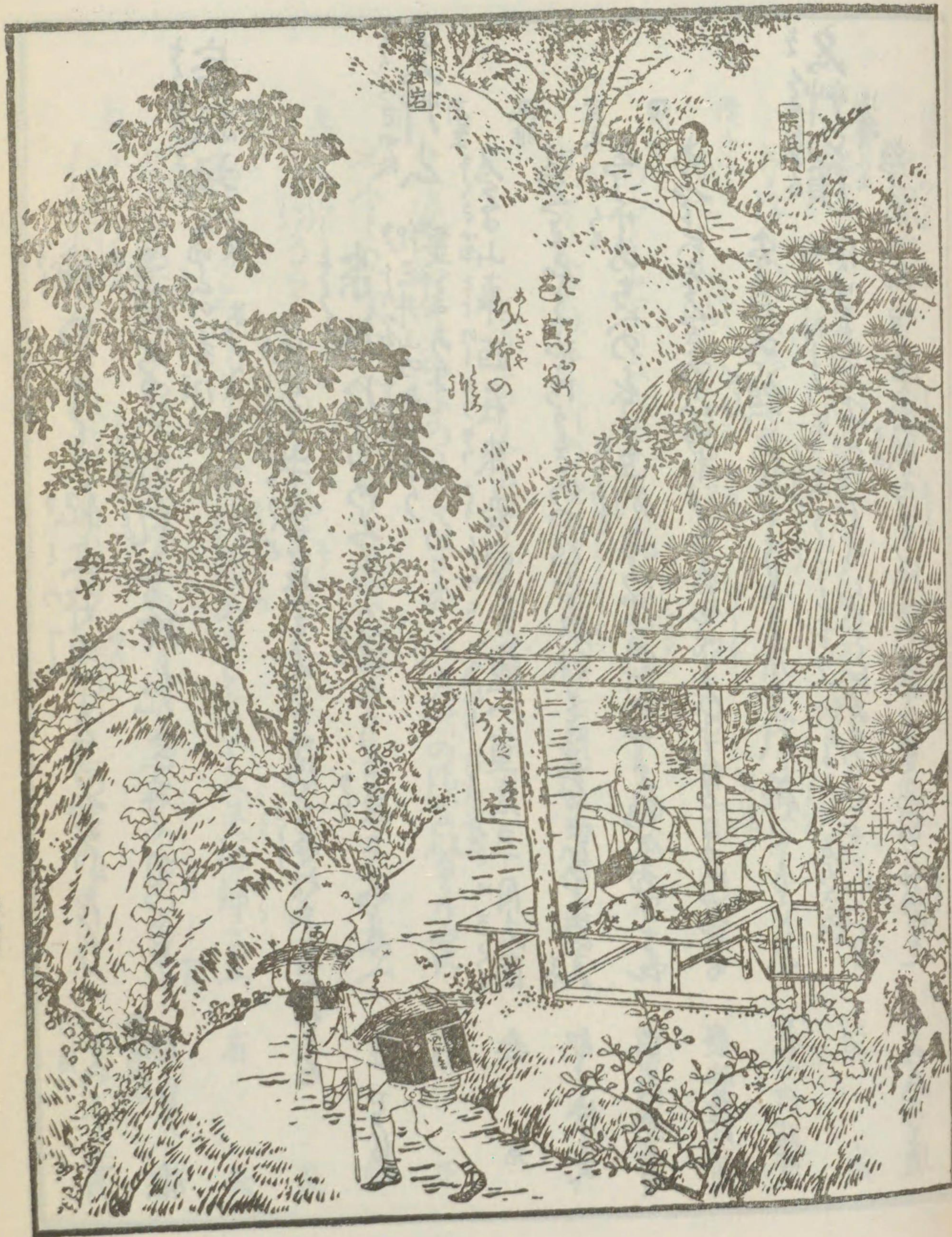
重渴酌杯中物厭食聞飯後鐘徒看三井地泥路忽難蹤。

紹述先生文集云山上有寺曰紀三井辰山面海磴道五層歷二百餘級峻如辟立  
上有堂塔僧坑此向接和歌濱海之地多有兩田堆沙作堤與石若蓋及暮和微雨而歸矣

りあふ山のさくさくまきまきくは三井山くは

りあふやうくは仲の帆と白く 槐さき人

らとくや仲のくはのまきまきくは 帆さき人













西凡今見生南後  
 荆岐含玉露濃



龍神來請僧乃俱入水庭及其師神授一貝一錫其後有梵鐘出海畔人怪之談  
 取之鐘不動於是僧出見之撫摩則鐘動而鳴其聲清亮 繫布於松連於於  
 鐘追以牽之所謂布引松是其緣也既而鐘甚輕而出遂置於手樓爾來七月九日  
 夜見龍灯于松下云補陀岸下有神僧一夜海鯨音出應白布緯松如茶布龍絹  
 千尺是龍燈云云

松遠く唐わのらなり 月ひり那 三三 千風

名物西瓜

布引村の瓜と上品の西瓜は夏年中流傳より廣州へ傳るる其  
 の瓜は肥ちの瓜長は尺五寸と傳るるも瓜は瓜の如く瓜の中  
 には瓜の如く瓜の中は瓜の如く瓜の中は瓜の如く瓜の中は瓜の如く

西瓜

祇南海

疏中碩莫若暑日功誰加虹霓彩隨刃冰霜涼似牙。  
 子傳黑齒國皮稱綠沉瓜吾體雖堪轉赤心豈可羞。

西瓜冷りあゝん客達くそゝあんれや しまんれ

こけ様とやうく抱はく西瓜の那 去 来

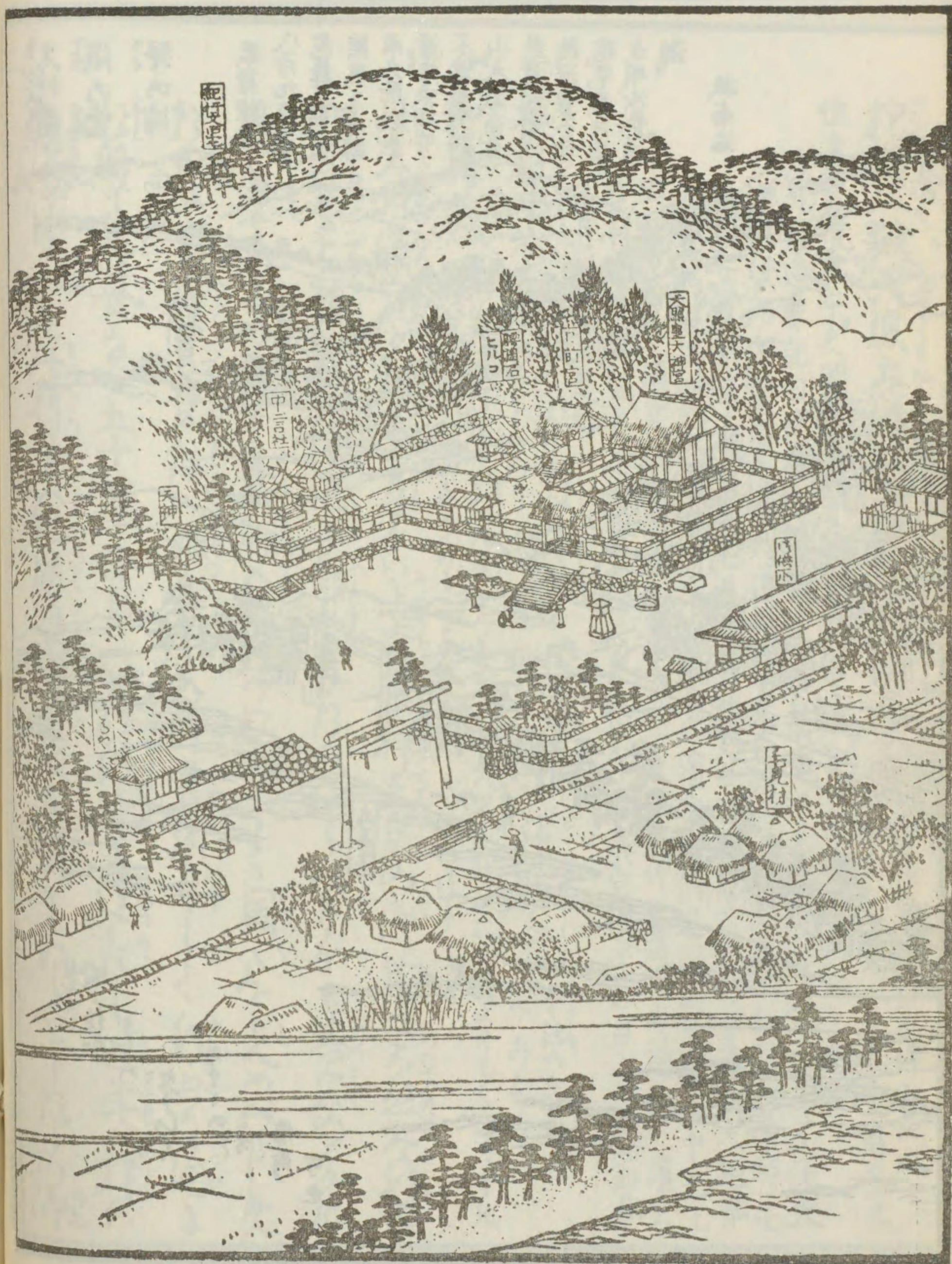
濱宮

毛の村にあり海村の生土神に 例は毎年九月廿三日ある日  
 は地を毛えとるむけは備はるあやうのええとるは  
 毛の村にあり海村の生土神に 例は毎年九月廿三日ある日  
 は地を毛えとるむけは備はるあやうのええとるは









くにわたりて國造りかの行勢とちりてなまこ一殿と春をさるる日前  
 國懸の大伴のそと神武天皇を征しあやまたれたあつて二種  
 の神靈もたてぬりつとて神靈代の神鏡神前神一を神武代  
 の日矛神前神一とすまつりて共々天照を神の前神靈にさす  
 まはそと天照根命を今日とておつてまたまらふたねの天照  
 根命二種の神靈と奉りて初め田圃をかを浦より本の本と後  
 らる浦をさるる岩が根にこけを根をさるるたむらりて是別日前國懸  
 り雨大神をさるる甲州の浦へ三丁ありて岩をさるる地より  
 此後豊饒入姫命神武天皇と奉りてこれよりあふれたるなりて  
 此地をさるるたむらりて天照を神に吉夜の名方の瀬文をさるる  
 天照をさるる雨を神にさるるはたむらりて無仁天皇  
 皇十六年秋月村の今の宮代の高をさるるたむらりて其の  
 りては社殿もてて高をたむらりてさるる天照の宮をさるる



右とあるは終つたならけり大市井のともある故や  
あはれ共の本立のえとてま一物の蔵のさむるまて并り  
あつちりゆつちりふき淡まらるる宮舎の蔵のゆきよう  
のさうとさうのさうとさうとさうとさうとさうとさう  
狂致

狂致  
往はる一ま林の外もがのきも真なるの林の心  
行凡

往満山善福寺  
日村のありけり  
本尊河弥陀佛  
善光寺の市也なり

現考也  
西國二十三年  
現考也

當寺の因奉久遠に詳なり大永天交年間の古  
宝物記録木の天の弘ふ灰ねりたりしとせ

市鎮座寫  
日平のさう  
市崎觀音堂  
日平山の屋

紀行文退隱舊趾  
宮山の頂上

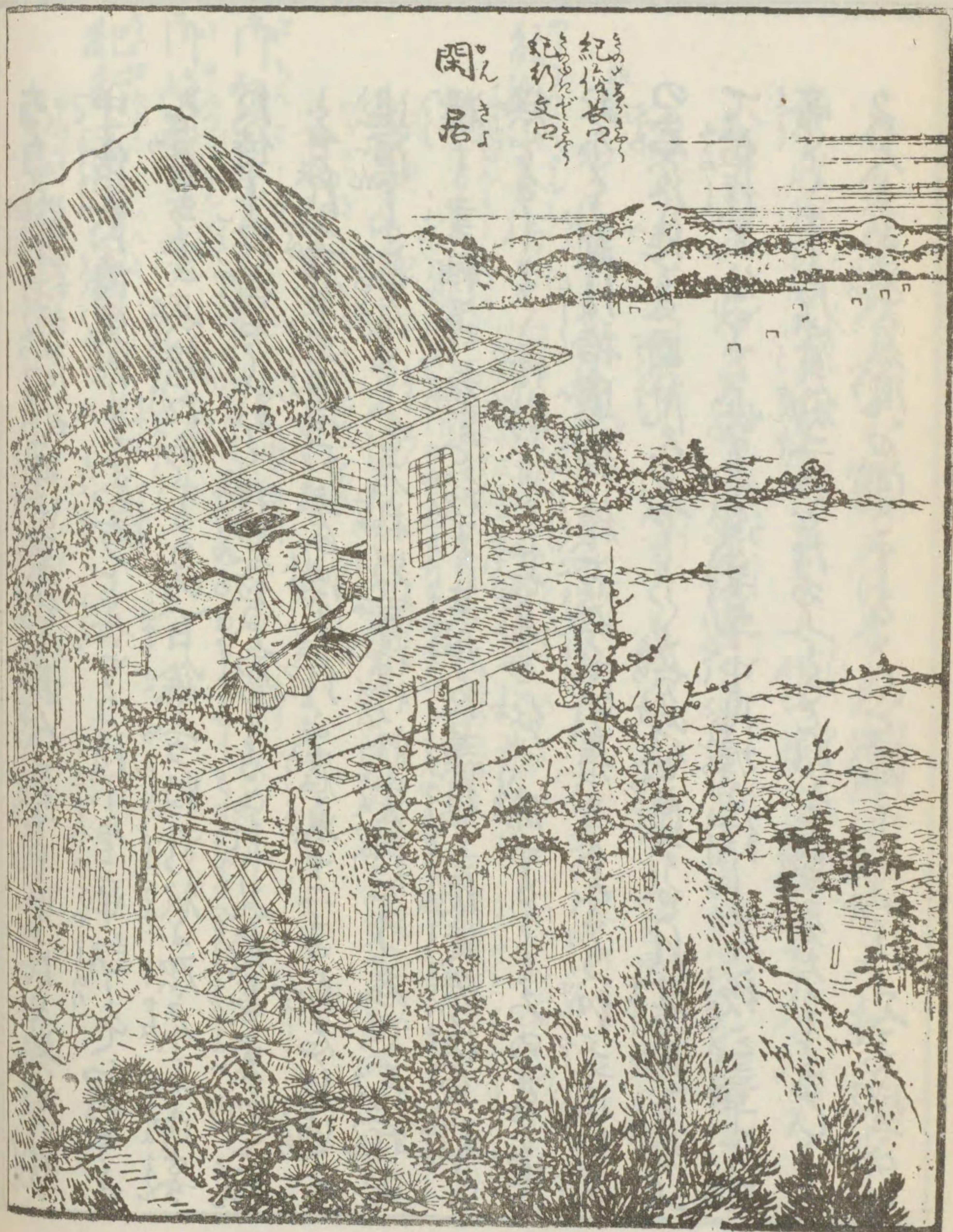
初泰信長の子なりとせの職をほそと才六十代の國造

あり 國造の職なり 國造家代は其人よりなりとせ

中後長の博學なりとせとせり後小中帝詔とせり  
を召し入る共持たありもの百餘を教給なり  
侍一宗用とせり位は叙せりも後長榮利とせり  
とせり後長榮利のなかりし後應永十二年初志は遠く  
退隱し居たりとせり梅敷百株竹千葉とせり  
標一書軸萬巻を移り其中に讀佳く酒徒琴侶引く  
嬉とせり一う優遊とせり其身を修めり其功とせり  
おろく新編拾遺新續古今集の集りんえり  
の志は終つて四代を告り其名を虚とせり其功とせり  
て位後二位なり嘗て承平中丹輝の侯とせり  
帝とせり寶劍二口とせり  
り人とも其家凡とせり



閑居  
紀伊長門  
紀伊文白



ちをりはりともいふれ文のくより貴寵とくやぬんもく  
 りあふぬ追ふく世榮と輝く此地の兩家と耳しく情を燃  
 震み放まみあはれしく討花のをやまたより尚付好庭の  
 人々のしるまは情と水泳のつくきも情をよむとあち  
 中にも東沼御師の贈序と日梅を竹園も終終浦暮煙の上  
 而中に有讀書絃誦聲者定其公之廬予予茅鞋竹杖遊  
 次回之とくくくこれとまき其人の風流むいさるまら  
 詠致をく新續古今に採採をり  
 琴の浦のまきはけやうたおんうもちも同のつるあれも 従三位行次  
 同  
 此地のゆきのとくはけ白あく地のつるをくまらぬあつた  
 自然くたのまありよりく此名ありく



後拾遺

新勅

志命法師  
 法印幸清  
 侍從隆教  
 衣笠内大臣  
 前大納言為良  
 正二位隆教  
 前大納言經繼  
 仲正  
 飛鳥井雅永  
 家隆  
 文貞公

琴浦松緑 俗所謂布枕松昔有神僧自能言獲鐘處其繁組松是也 祇 南海  
 繫組千古緑 琴浦得松風 琴自聞波底華  
 鯨何處吼 無人試問洞庭君

春の夕や浪も若らば夕のうら

槐亭老人

明見社 内原村西四丁の麓あり一村の生玉神也九月廿三日 春日神社 日高持待の南の岳にあり土人の信を奉る  
 船尾 中より三平教團の御船補任際目の古記あり船尾の地土のことと云ふ

補任 船尾御刀祿職事

右以藤原為宗令補彼職之上者守中下  
 中事亦世相違ふ令勤仕 状如件  
 建武五年七月十四日 預所判

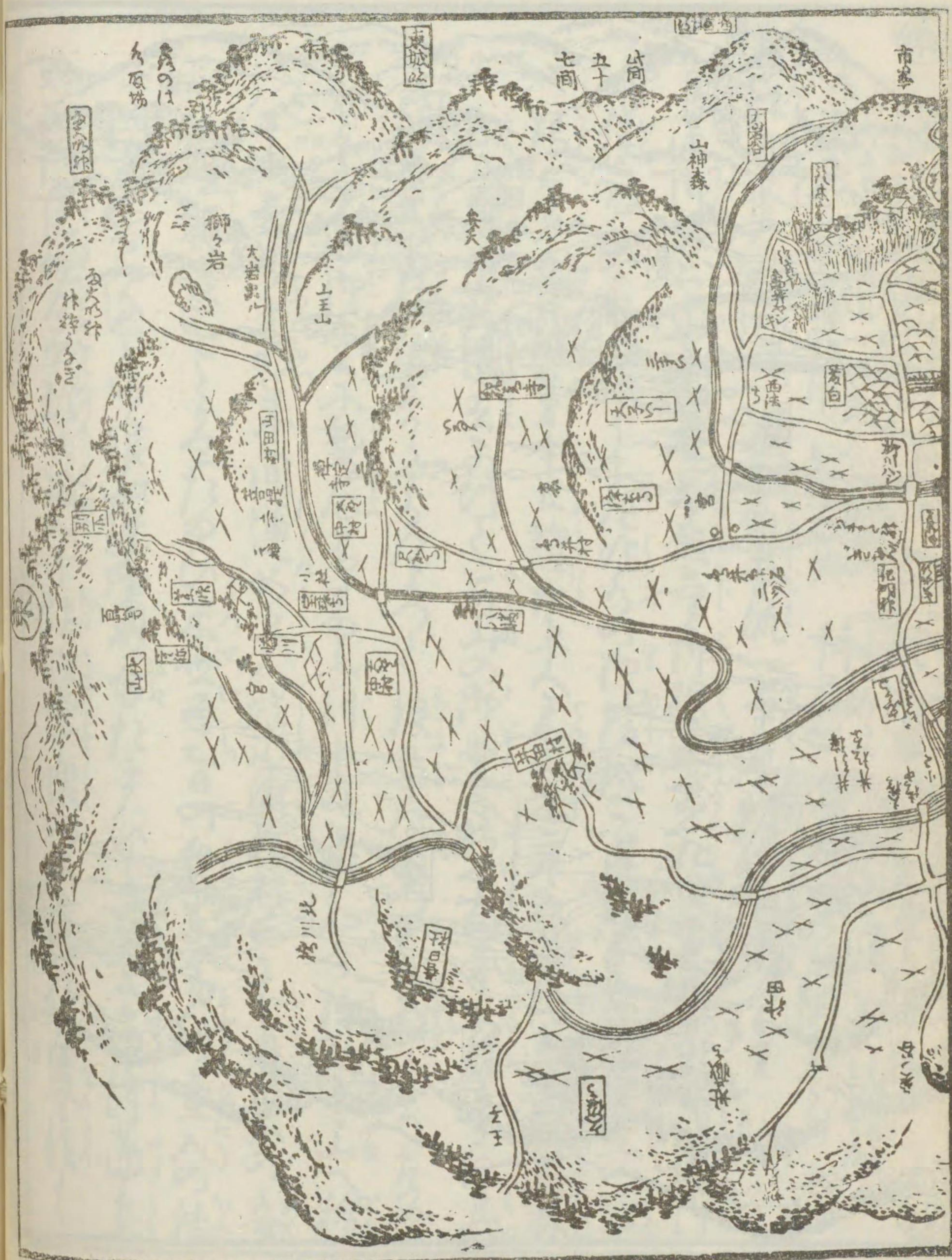
天照太神 名草齋神  
 春日明神 名草姫神  
 箕嶋 推現鼻  
 神樂舎 三十二枚の紙を巻く  
 内濱 中より三平教團の御船補任際目の古記あり船尾の地土のことと云ふ







黒牛湯  
 中言社  
 黒江御坊



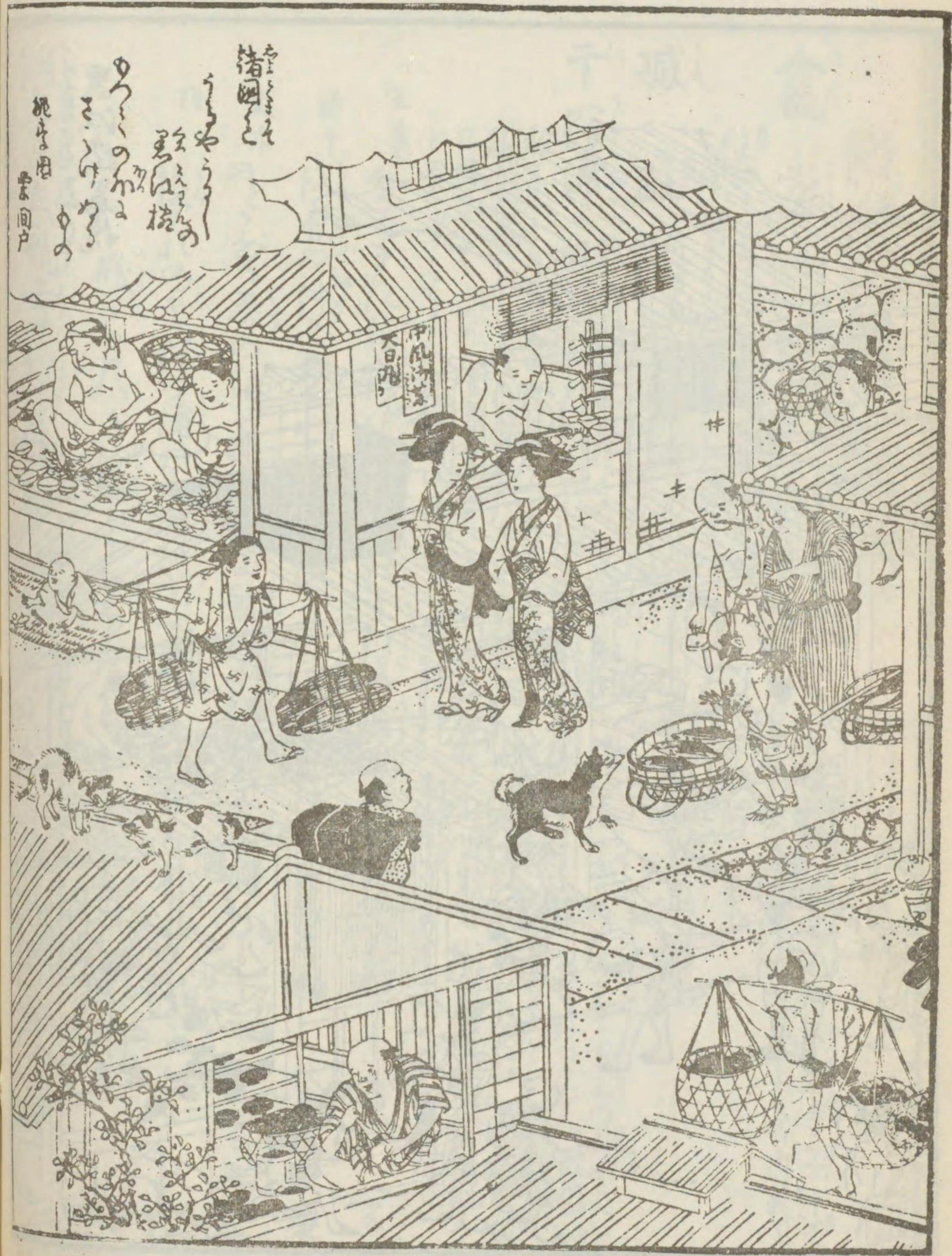






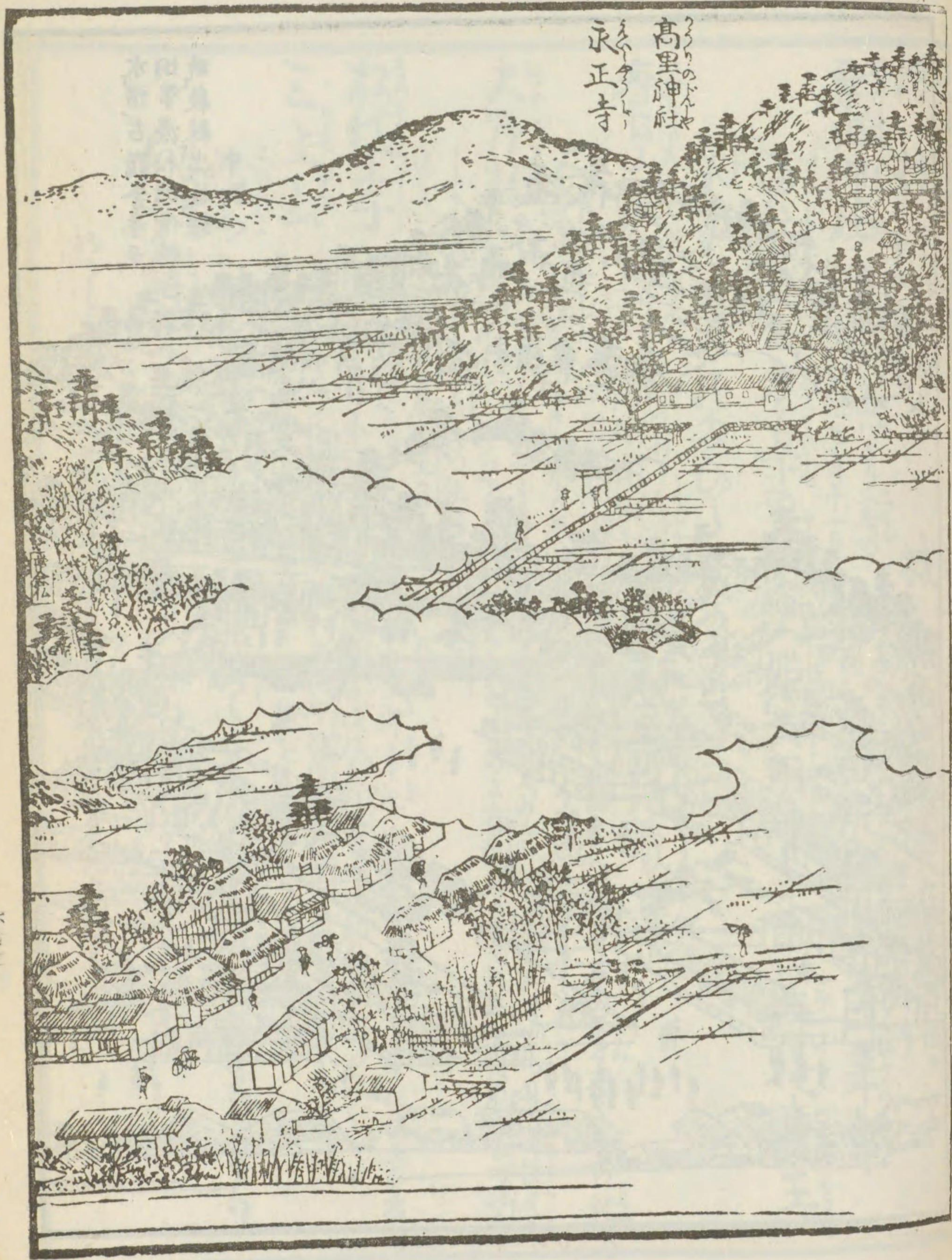






観音堂  
 善宮八幡宮  
 辨天山正定惠院永正寺  
 立像り〜〜〜妙人寺  
 徳教上人 鎮守弁財天社  
 當山原古刹りて開創はまきのりんちつあや海く洋の  
 跡とれ村老こい瓜守ら〜〜ありらうら〜〜爰中比上蓮社  
 自云果善上人 先師日御浄者ち超蓮社  
 上巻上人の遺跡とせたるの屋法務の〜〜々然や三  
 山よま〜〜〜あらんそせ地とせささたひい〜〜に村中一箇の  
 信が橋爪氏たるもの上人瓜守ら〜〜兼金吉不屈致一鎮  
 石の〜〜の法味ら〜〜とあふ聴聞り〜〜深く信心のねも





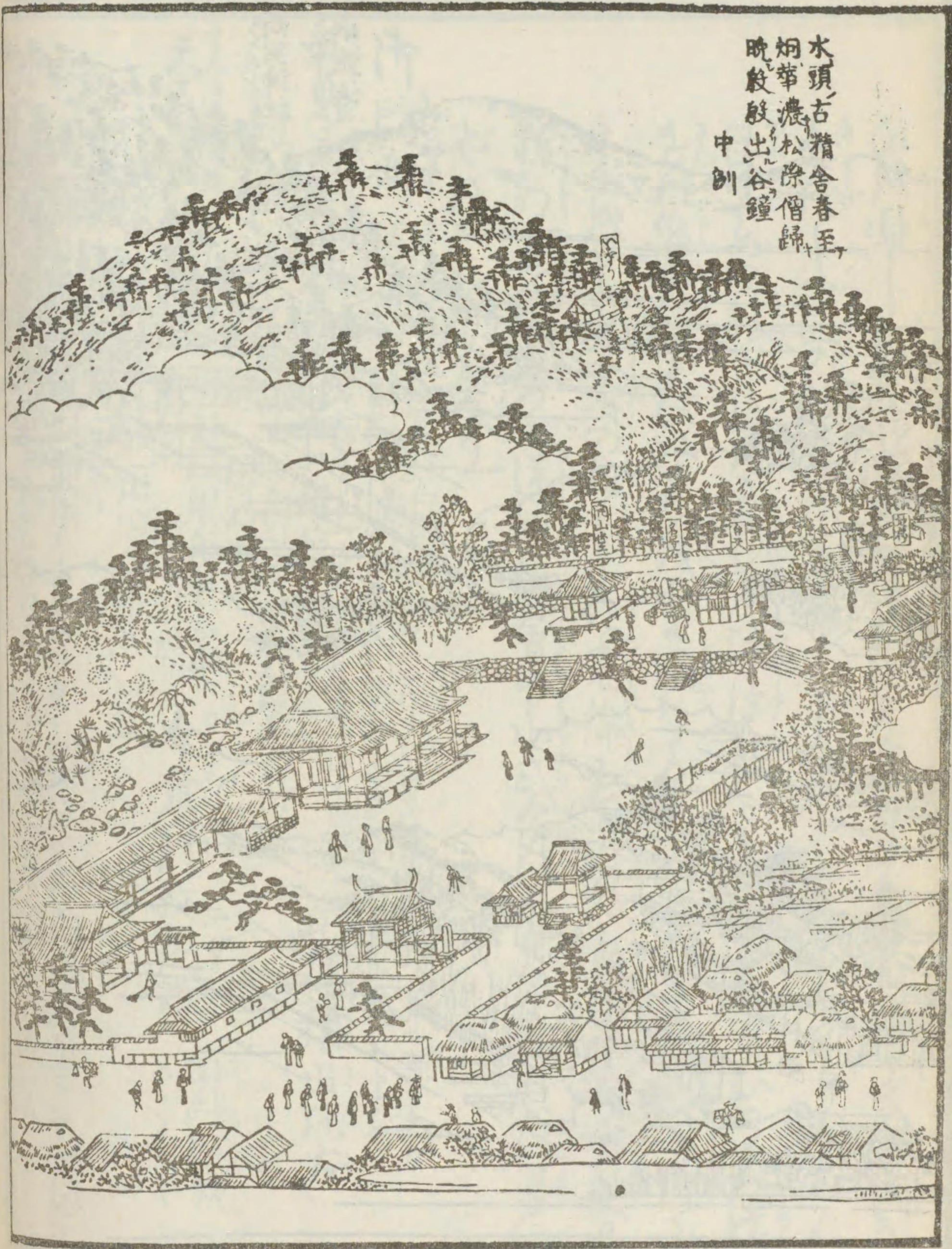
高里神社  
永正寺

山崎一類の通のつらさをよそすから 許々の田園を  
 喜捨一區の梵宮をせよ 上人のあはれをせよ 上人  
 法をあらにせよ け地を御成法を絶たせよ 上人  
 をれ備えよ 上人の法を御成法を絶たせよ 上人  
 上人のあはれをせよ 上人のあはれをせよ 上人  
 初の日多しとて 遠修海會のふ式今日月十五日 経書  
 とくをせよ 上人のあはれをせよ 上人のあはれをせよ

沖門町 山崎一類の通のつらさをよそすから 許々の田園を  
 妙見寺 山崎一類の通のつらさをよそすから 許々の田園を  
 本社 山崎一類の通のつらさをよそすから 許々の田園を  
 天香山阿弥陀寺 山崎一類の通のつらさをよそすから 許々の田園を  
 昭王波加不動明王 山崎一類の通のつらさをよそすから 許々の田園を  
 大師堂 山崎一類の通のつらさをよそすから 許々の田園を  
 紀神様田比古



水頭古精舎春至  
 烟華濃松際僧歸  
 晚殿殷出谷鐘  
 中創



栗田村 今栗田村より

城趾

栗田の山の山上にありこゝに生時

栗田神社

井田村の山にあり一村の

祀神

栗田朝臣祖彦國章命

あはれとて春白下のはらへ姫大明神まことの豊後房王

子ももろはなむらうまうま

春日山徳道院

和歌のありま言ふ古義

本寺地蔵尊

大師堂

春日山にありま言ふ古義

大野坂

春日山の西のふりてり

松代王子

春日山の西のふりてり

こ上公

春日山の西のふりてり

此のまはらへはなむらうまうま

みづのたけ南島をめぐり月渡りくえん





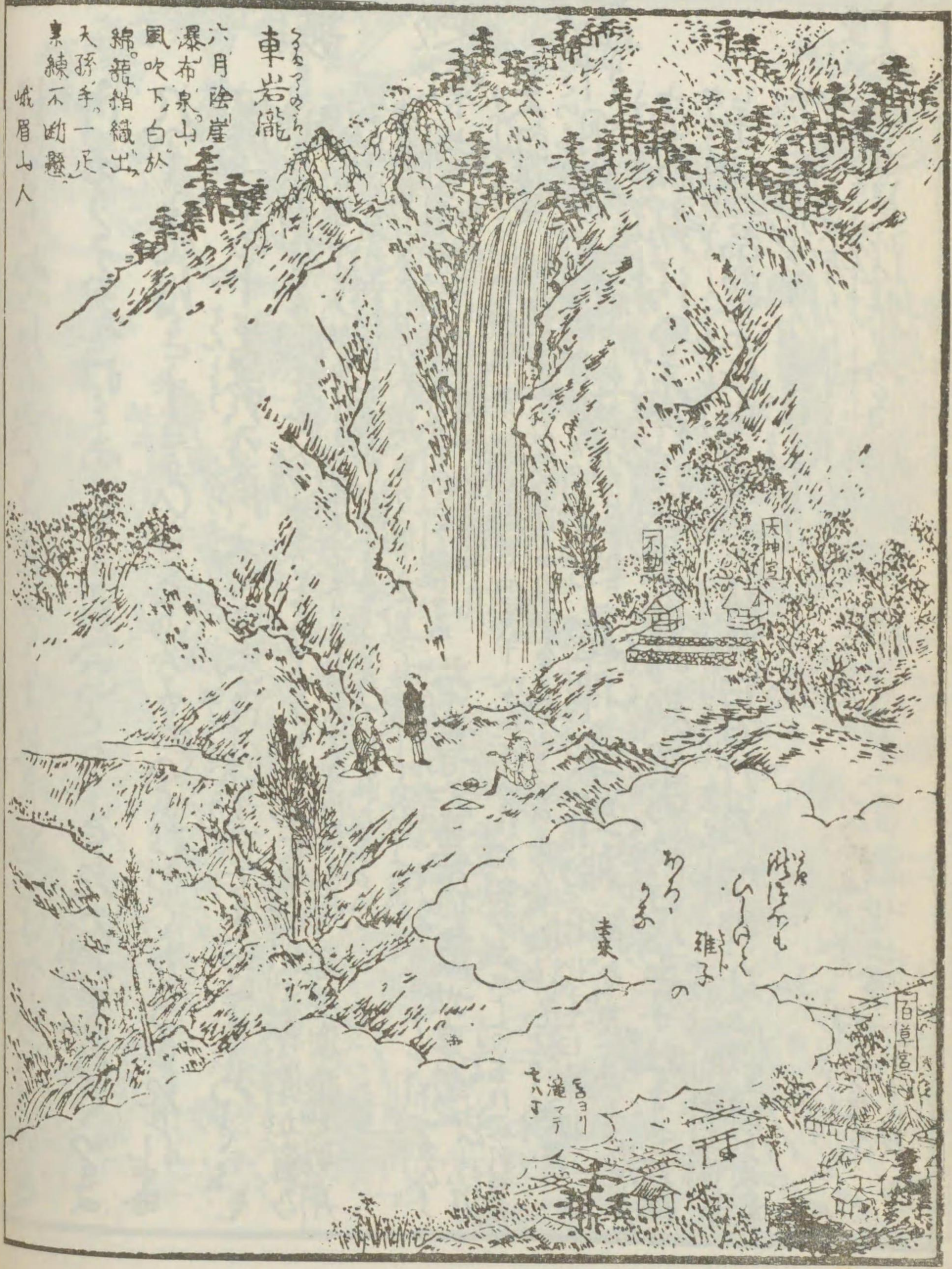












車岩窟  
六月陰崖  
瀑布泉山  
風吹下白於  
綿。龍猶織出  
天孫手。一正  
東練不助懸  
峨眉山人

大師堂  
此は大師の御坐所なり。西國に於て四國十八ヶ所と云ふ。此の所は其の五ヶ所の一なり。此の所は大師の御坐所なり。西國に於て四國十八ヶ所と云ふ。此の所は其の五ヶ所の一なり。此の所は大師の御坐所なり。西國に於て四國十八ヶ所と云ふ。此の所は其の五ヶ所の一なり。

車岩の瀑布  
此の瀑布は、昔より名高く、百草樹の影を映して、天照大神の御坐所と云ふ。此の所は大師の御坐所なり。西國に於て四國十八ヶ所と云ふ。此の所は其の五ヶ所の一なり。此の所は大師の御坐所なり。西國に於て四國十八ヶ所と云ふ。此の所は其の五ヶ所の一なり。

長笠山  
此の山は、昔より名高く、百草樹の影を映して、天照大神の御坐所と云ふ。此の所は大師の御坐所なり。西國に於て四國十八ヶ所と云ふ。此の所は其の五ヶ所の一なり。此の所は大師の御坐所なり。西國に於て四國十八ヶ所と云ふ。此の所は其の五ヶ所の一なり。

十二所権現社  
此の社は、昔より名高く、百草樹の影を映して、天照大神の御坐所と云ふ。此の所は大師の御坐所なり。西國に於て四國十八ヶ所と云ふ。此の所は其の五ヶ所の一なり。此の所は大師の御坐所なり。西國に於て四國十八ヶ所と云ふ。此の所は其の五ヶ所の一なり。

長笠山の龍院願成寺  
此の寺は、昔より名高く、百草樹の影を映して、天照大神の御坐所と云ふ。此の所は大師の御坐所なり。西國に於て四國十八ヶ所と云ふ。此の所は其の五ヶ所の一なり。此の所は大師の御坐所なり。西國に於て四國十八ヶ所と云ふ。此の所は其の五ヶ所の一なり。

本寺千手千眼觀世音  
此の観音は、昔より名高く、百草樹の影を映して、天照大神の御坐所と云ふ。此の所は大師の御坐所なり。西國に於て四國十八ヶ所と云ふ。此の所は其の五ヶ所の一なり。此の所は大師の御坐所なり。西國に於て四國十八ヶ所と云ふ。此の所は其の五ヶ所の一なり。

然形之所権現社  
此の社は、昔より名高く、百草樹の影を映して、天照大神の御坐所と云ふ。此の所は大師の御坐所なり。西國に於て四國十八ヶ所と云ふ。此の所は其の五ヶ所の一なり。此の所は大師の御坐所なり。西國に於て四國十八ヶ所と云ふ。此の所は其の五ヶ所の一なり。

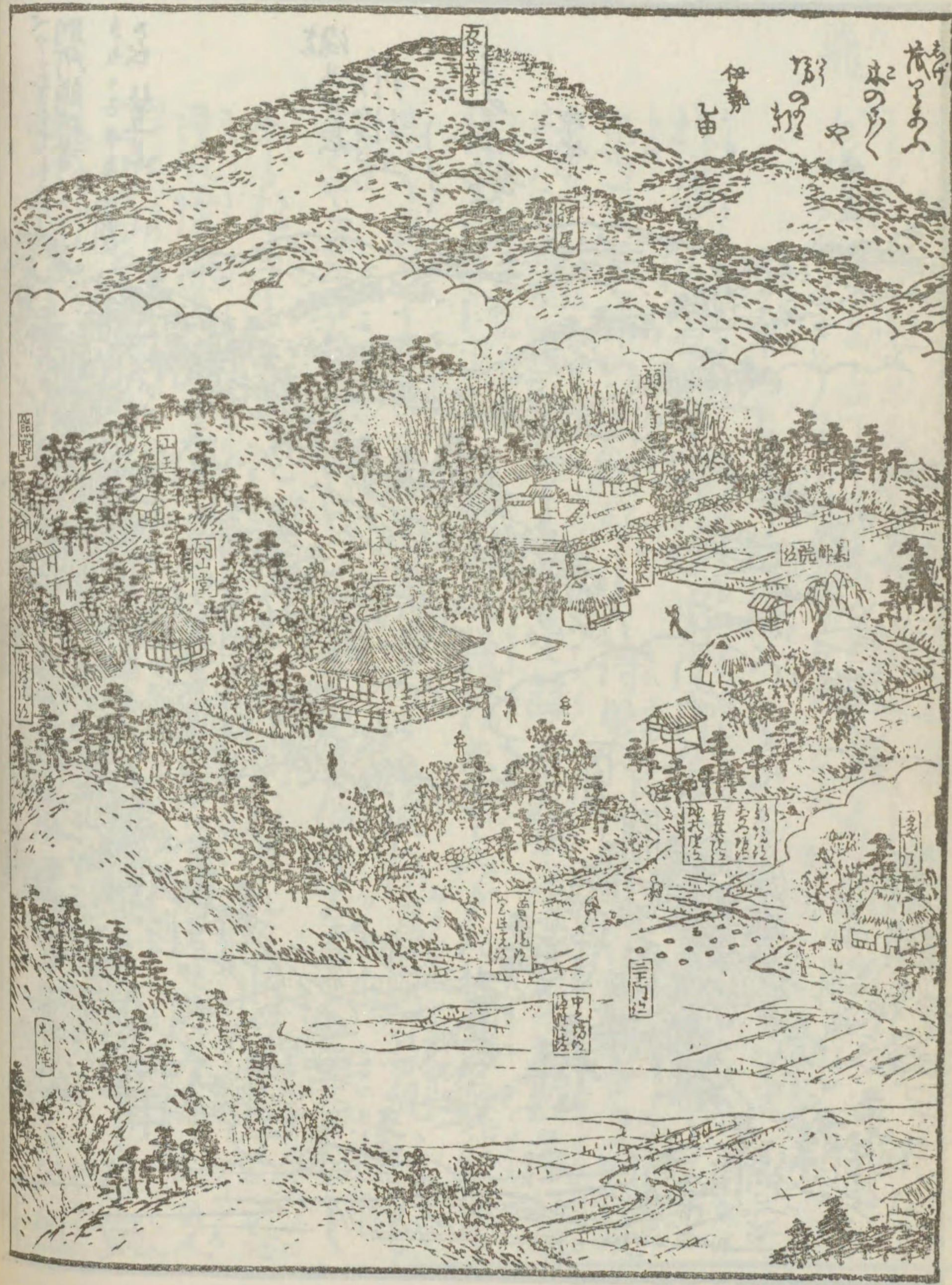
鐘樓  
此の鐘樓は、昔より名高く、百草樹の影を映して、天照大神の御坐所と云ふ。此の所は大師の御坐所なり。西國に於て四國十八ヶ所と云ふ。此の所は其の五ヶ所の一なり。此の所は大師の御坐所なり。西國に於て四國十八ヶ所と云ふ。此の所は其の五ヶ所の一なり。

觀音堂  
此の観音堂は、昔より名高く、百草樹の影を映して、天照大神の御坐所と云ふ。此の所は大師の御坐所なり。西國に於て四國十八ヶ所と云ふ。此の所は其の五ヶ所の一なり。此の所は大師の御坐所なり。西國に於て四國十八ヶ所と云ふ。此の所は其の五ヶ所の一なり。









満... 願成寺... 奉讓波別所之山地壹處事

僧湛慶

在紀伊国三上院重野御奥山中

四至

東限、峯道、西限、衣笠山、南限、隴上黒山、北限、自大野、界近于古田口。右件別所者是湛慶之三上院座令開闢起切閑深山、與今建立堂宇招居住僧等以里肆町宛行各食物免除、公事并官物致歸依故件山中東西拾陸町、南北拾陸町、以令寺領者可令于至慈尊三會曉廻向者、抑黒山者是伐以爲主野者、又以開闢爲主事、世常習也、就中件山之本主者、紀貞正相傳私領也、弗彼貞正行得之、有物臣多之、故以重野御奥山等令并濟行得之、出舉伐早隨、又全、無日他主人、仍別所奉讓渡湛慶之舍、第中納言君宗顯者也、以不可寺勢執行之、狀如件故、以解、

久壽二年正月

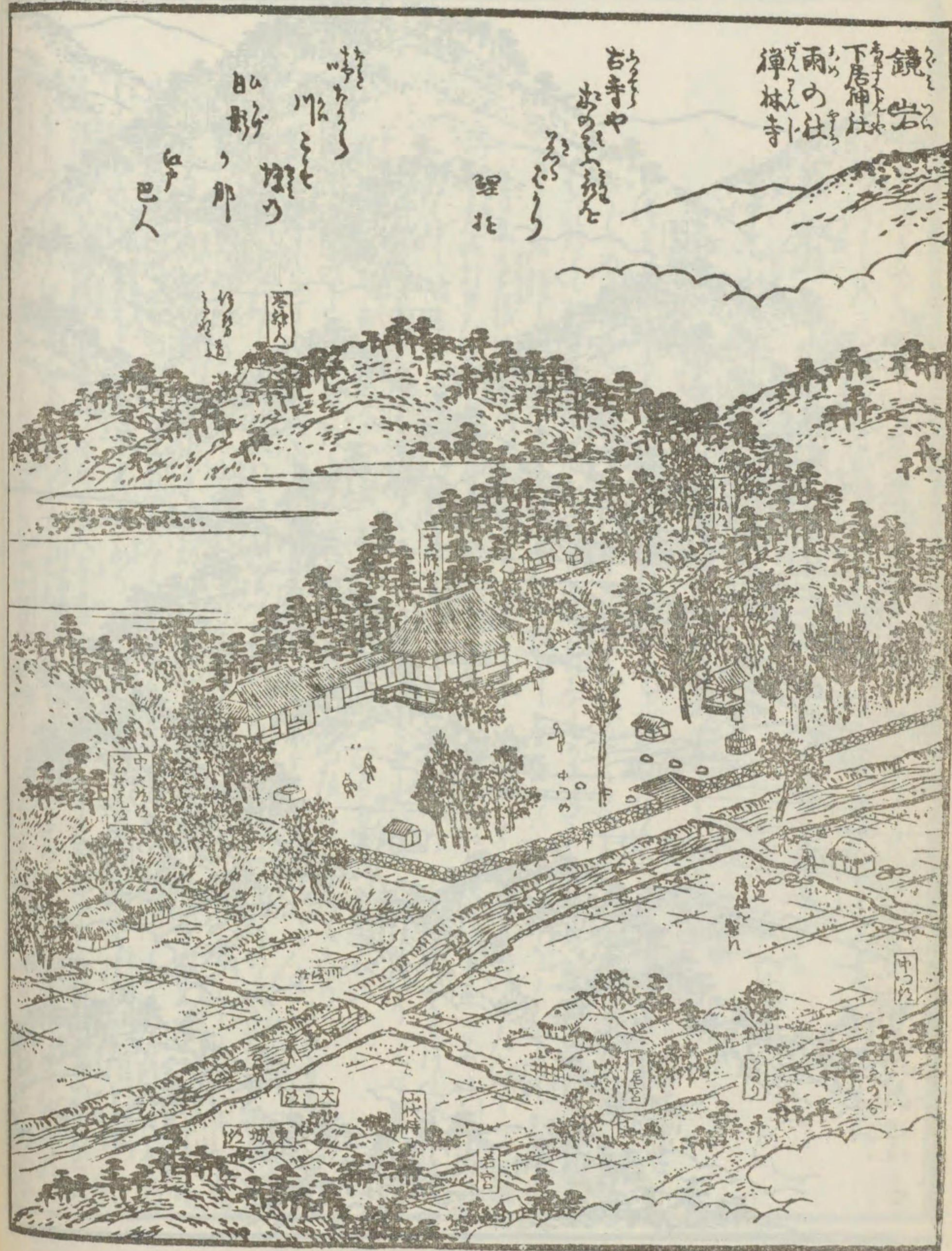
本願上人湛慶

西行... 抄... 三院の上人... ちく... 六六六









幡川山禪林寺  
 大除堂  
 道守行  
 什賓  
 夫  
 為  
 豫  
 の  
 平  
 建  
 意

幡川山禪林寺  
 大除堂  
 道守行  
 什賓  
 夫  
 為  
 豫  
 の  
 平  
 建  
 意

幡川山禪林寺  
 大除堂  
 道守行  
 什賓  
 夫  
 為  
 豫  
 の  
 平  
 建  
 意











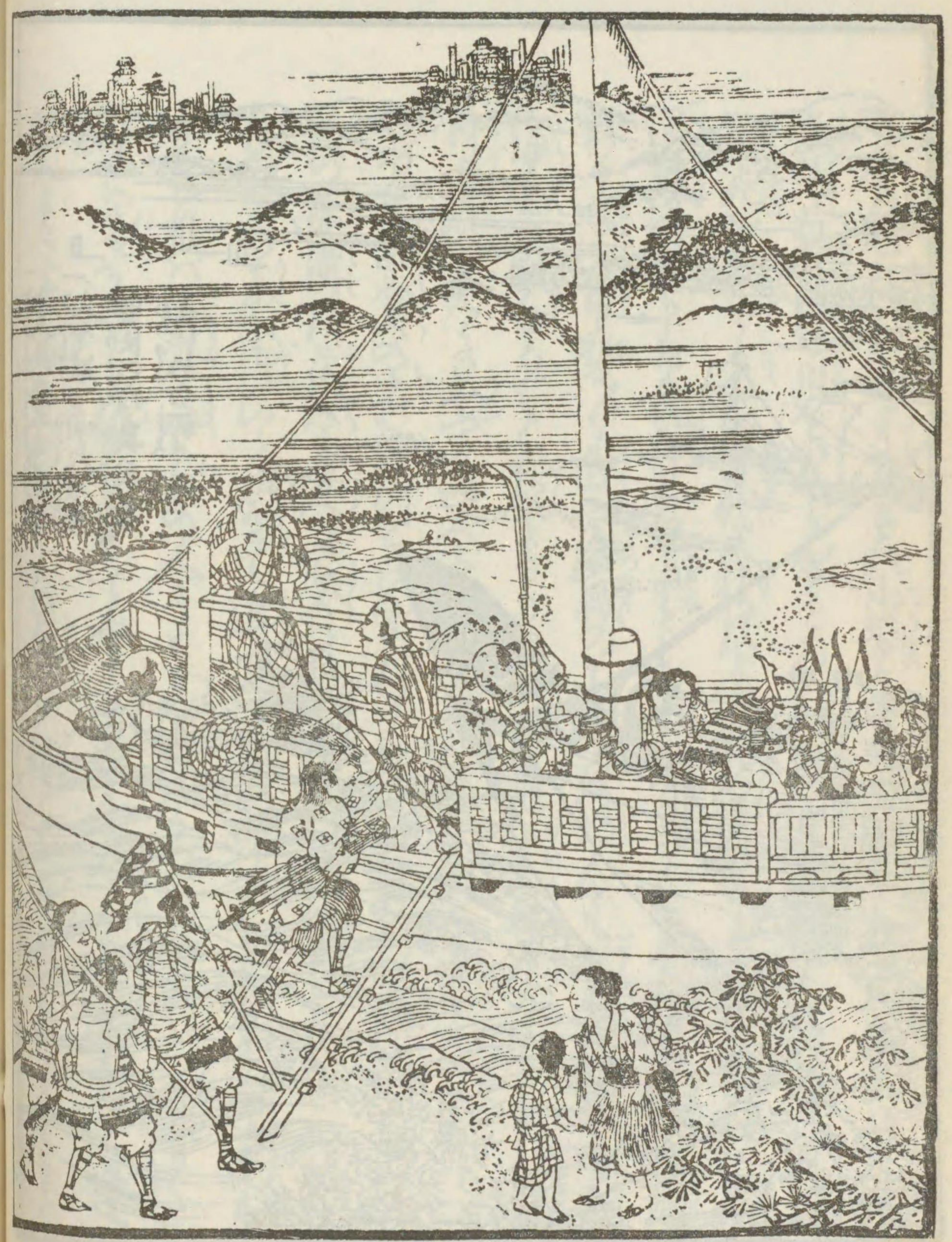








八幡宮の座のんこしてけけ義にそいへたるそいへるの御用云  
 云々北の東の浦より船とつ艘引寄る二月廿五日の曉  
 千原の浦より船をよせし上りふこたは先づ甲斐の義理  
 志んく思業とあひこころ先づ上り内談かへてそいへ  
 由良の渡へあつたなすしより山伏の渡りあつたり然るに  
 ねいこゝを渡りまゝの舟の舟に上り上津山とらちこたへ  
 南朝の方へやまのるべし異り過るるなるの御理をま  
 さいたるいねえ由良の寺へあつたりゆき上人舟を削り具  
 地へ信家へへし船へいりかたかひく由良の御國へて  
 泉へしこいなるるら長光と相着ありてりあひあひのうら  
 せの中にもあつたりあつたりとて悔はあまをほのめりて  
 一いつぱは後々北の長老とあつたり思ひへ後れもあつて  
 としあつたり日まゝり山伏の棟梁とてあつたりあつたり  
 の船をちんを













魑魅に托一蒼苔層疊一もも雄姿の天地より一  
文物の日星とともんき

亀舟の泉

日村にありは泉の淵海にあり 沖靈の神社 日村の南にあり

小中山言言院觀音寺

日村にありは言言院の觀音寺 奉安を祝せ

大師堂

日村にありは大師堂の御作

友白墨

友白の墨は皇御山より奉りて

家集 とうる墨の友白の秋の夕たえ七日の祝の玉はと 冷泉の墨

あつた松のつる友白の墨は名もた松の玉つと

友白の墨は皇御山より奉りて

友白の墨は皇御山より奉りて

友白の墨は皇御山より奉りて

友白の墨は皇御山より奉りて

友白の墨は皇御山より奉りて

友白の墨は皇御山より奉りて

友白の墨は皇御山より奉りて

友白の墨は皇御山より奉りて

後水三郎重光の宅

後水三郎重光の宅 日正の宅

左京林別、後水三郎重光の宅、日正の宅、伊勢色雄命の御宅、姓氏録

後水三郎重光の宅、日正の宅、伊勢色雄命の御宅、姓氏録

後水三郎重光の宅、日正の宅、伊勢色雄命の御宅、姓氏録

後水三郎重光の宅、日正の宅、伊勢色雄命の御宅、姓氏録

後水三郎重光の宅、日正の宅、伊勢色雄命の御宅、姓氏録

後水三郎重光の宅、日正の宅、伊勢色雄命の御宅、姓氏録

後水三郎重光の宅、日正の宅、伊勢色雄命の御宅、姓氏録

後水三郎重光の宅、日正の宅、伊勢色雄命の御宅、姓氏録

後水三郎重光の宅、日正の宅、伊勢色雄命の御宅、姓氏録

後水三郎重光の宅、日正の宅、伊勢色雄命の御宅、姓氏録

後水三郎重光の宅、日正の宅、伊勢色雄命の御宅、姓氏録

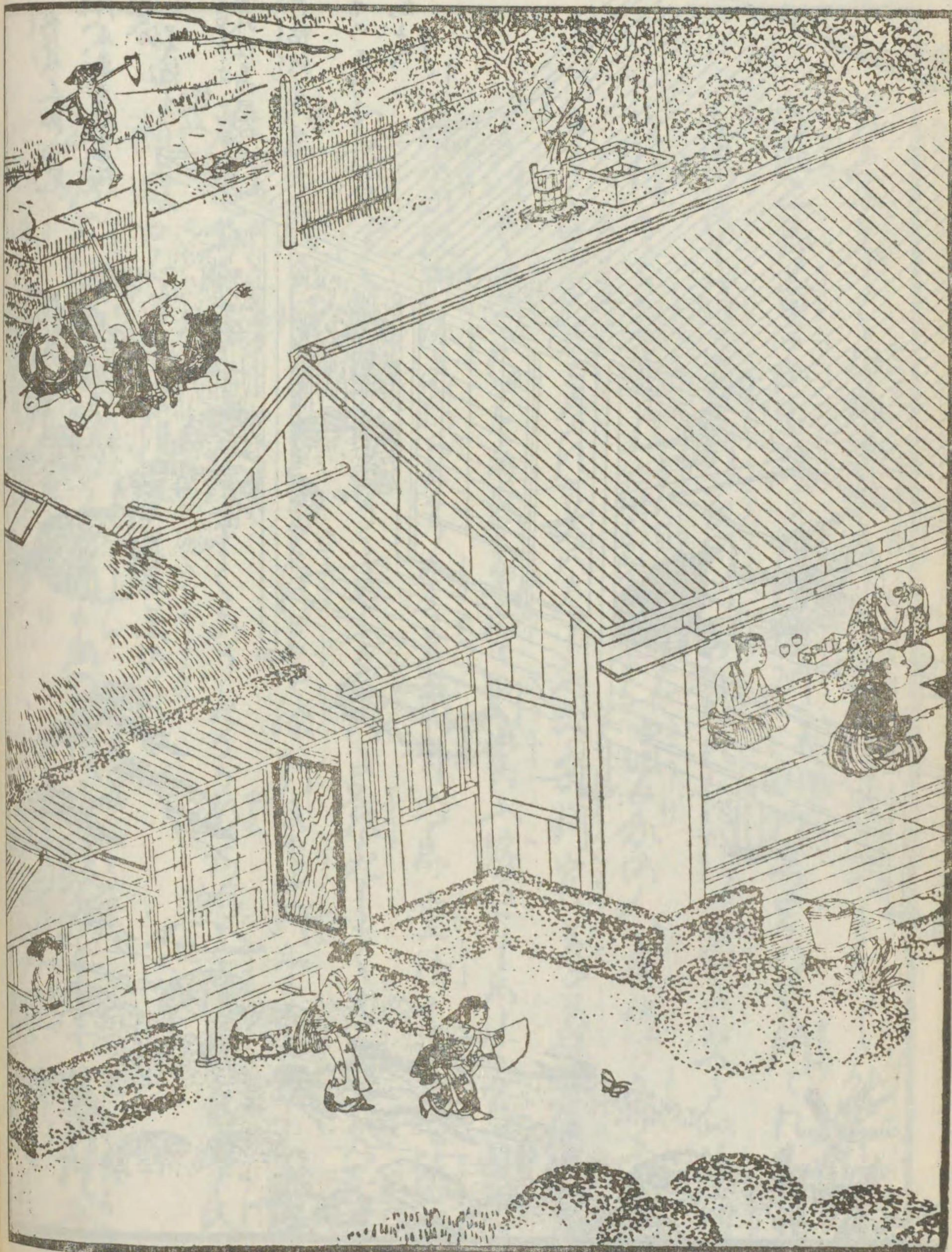




他は三郎の宅  
 後醍醐天皇の御  
 所  
 古帖  
 のあひ  
 かし

ちふふくくは地ふ家居一々其体はあつとあつて然申文治  
 の比之身重家とつる源豫州と終に去つて所とれ戦  
 をあつて終る若州長川の合戦に信が忠よつて縁明  
 に代つて討死に頼朝の義経のあふく  
 まく忠義をなすゆゑのたゞの六条判官なる義の属とれ  
 よいゝ梁がらとあふ瓜を割つて當上塚にゆつて代  
 原をたれ由縁あつてあつて今も亀井の島重清とよつて縁明  
 にゆつて数軍のあつてゆゑ長川に戦死し忠義の名とあ  
 へあつてゆゑゆゑゆゑゆゑゆゑゆゑゆゑゆゑゆゑゆゑ  
 本電舟のふ士連続してあつてあつてあつてあつてあつて  
 断滅せりゆゑに佳手なとこの比  
 神君と及沖津のあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて  
 にはあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて

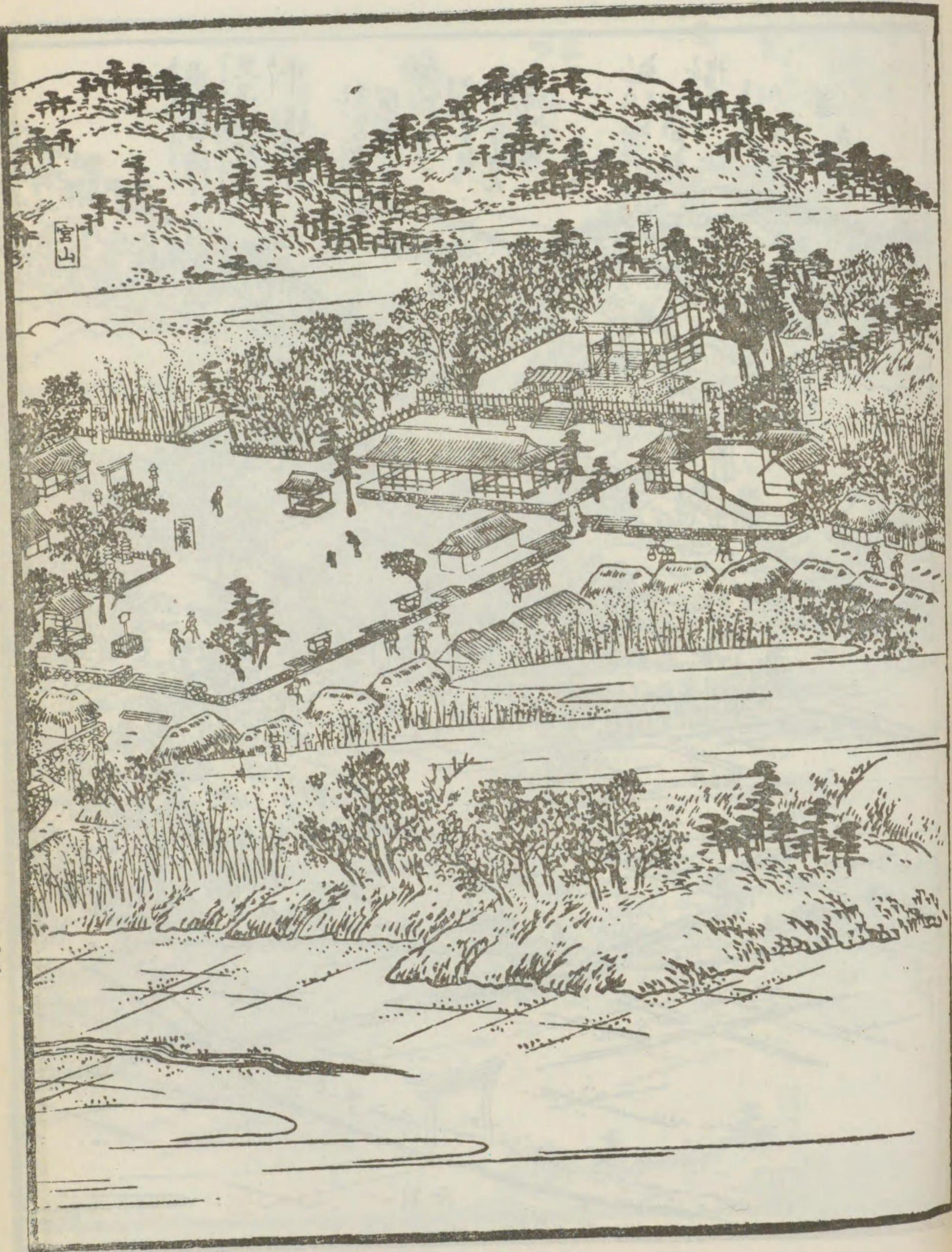




南龍君沖入國のまらり向んらくこ山瓜場い今入連綿ら  
 其より一一代の帝王徳や二山沖幸あやまらなるは風筆  
 とめくき神孫の絶ざるに瓜賞とせたまひ中右より玉護院  
 宮がうい三宮院沖門主沖入奉あるたひにほひに沖集あをた  
 まへく中ふ希代の名をかこりて一一家藏さるるもあまを家定  
 清太の書簡義経よりあたる所のたかたかい感状諸家の  
 書簡太あつは地より人住くとも瓜訪つく展覧は又  
 好古乃一奇事あり

他伊のちの白とありなを比はまらに三島を家の末令に  
 あうしはねよいあきまらたうい依りしよ門築地押まら  
 何れもみくたをたの根をさるりてとらに地まら  
 まこまらんとへのう掛ねし古本金もあり  
 及しゆやこいしん門よまらきい  
 炭くや 後本亀井、おのね 其 東 角





藤白浦  
圓座石

仲宿所  
藤白浦は古く中古を代りて書くと享保年中より  
 圓座石は石の座の中より

後本三郎殿

二月廿八日

亀井六郎重情

右所紙翌月之奥加一可有仲下向くらと作其許  
 舟徑之作其許もは作しんを其図をいどく流と

亀井六郎より後本家(後加)より送るに日

亀井六郎田宅趾

相馬の山にありの山家潜い  
 後本家より

維子帯や竹本が寂のひく人  
 若山 槐 亭  
 此中鮫や丹後鮫よりと也い然る者のすれぬ  
 教 一 洞  
 若くつのは前の鈴ゆ氏やろと作る後世なる家  
 美山 眠





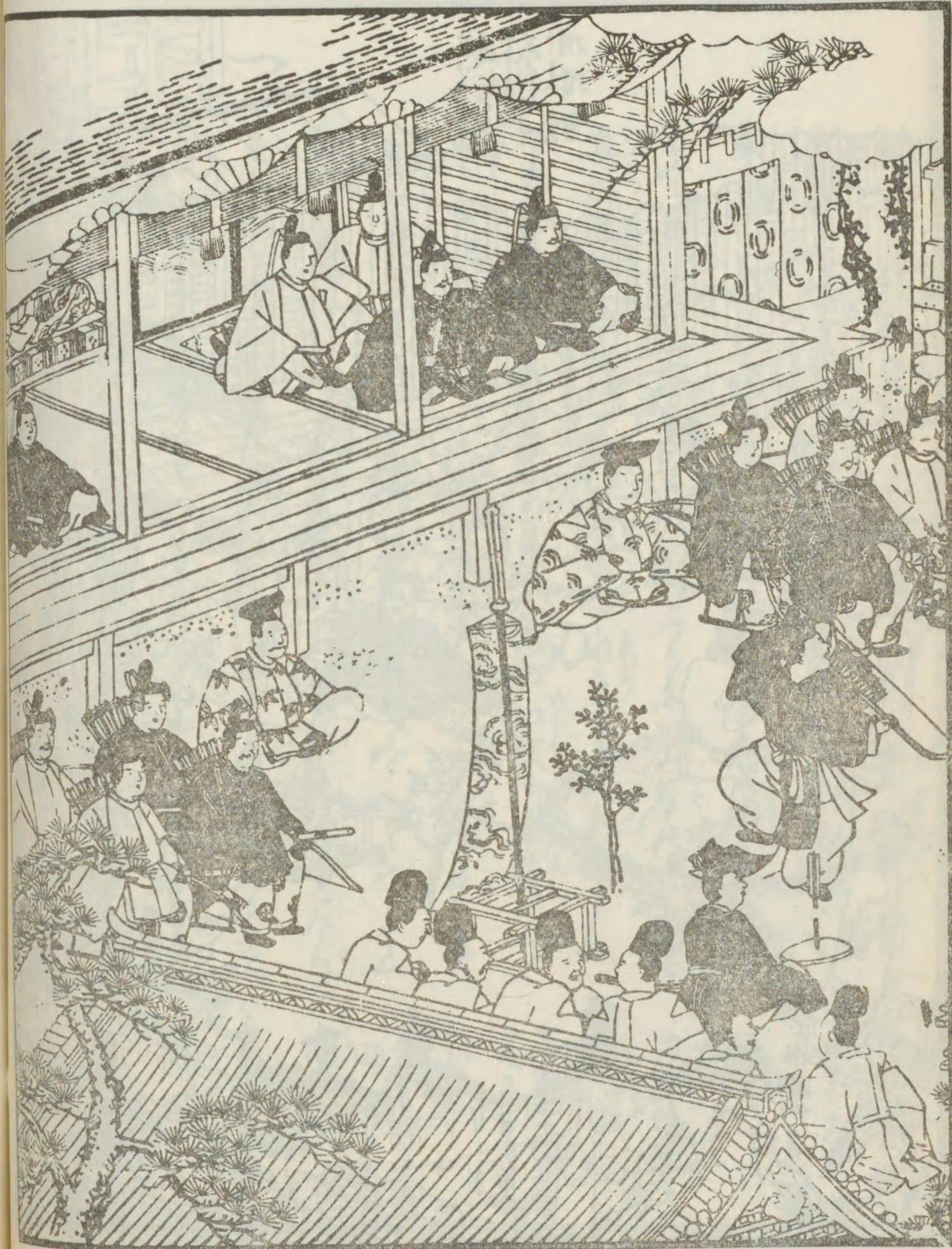














日あつての松の蔭に紅葉も目にもとやまらぬ

皇太后少進  
及奉信濃

風香もかきし海まのり長きよも月あつた

日  
右馬助源朝臣  
家長

ふるふ秋のそとへはたのたをなすを

日

百千鳥の舞の舞はるる月すむのたをすん

日

ねいしはるの秋の薄たつたのこもりの

日  
名原信光

塩田やあつたの白の雪もあつた

日

石の居 徳臨憶記云。寛仁元年秋九月日永田村菴思住謹誌。中道寺在之門前創立馬小寺。

當社の鎮座も久遠さうりつたの帝王

日

初幸ありしとも然る後も

日

のいふことな初訪るるも

日

文相二年とて十八年とて長二年の松

日

仲幸記曰く師事もあつた

日

所の王子は

日

松平所大権現の遥拜の地とて

必る日やゆいあくる九十九所

鯉風

藤白王子

藤白の御名ありて今藤白王子の御名なり

今藤白の御名なり

松平所大権現中延寺

王御権現の御名なり

今藤白の御名なり

友白仲坂

友白の御名なり

万葉

藤白三坂乎越跡白坂之我長于者所泊香裳

後古

友代の名なるも白坂の御名なり

新千

友代の名なるも白坂の御名なり

新後

長手の名なるも白坂の御名なり

丈夫

白の山なるも白坂の御名なり

丈夫

白の山なるも白坂の御名なり

丈夫

白の山なるも白坂の御名なり

丈夫

白の山なるも白坂の御名なり









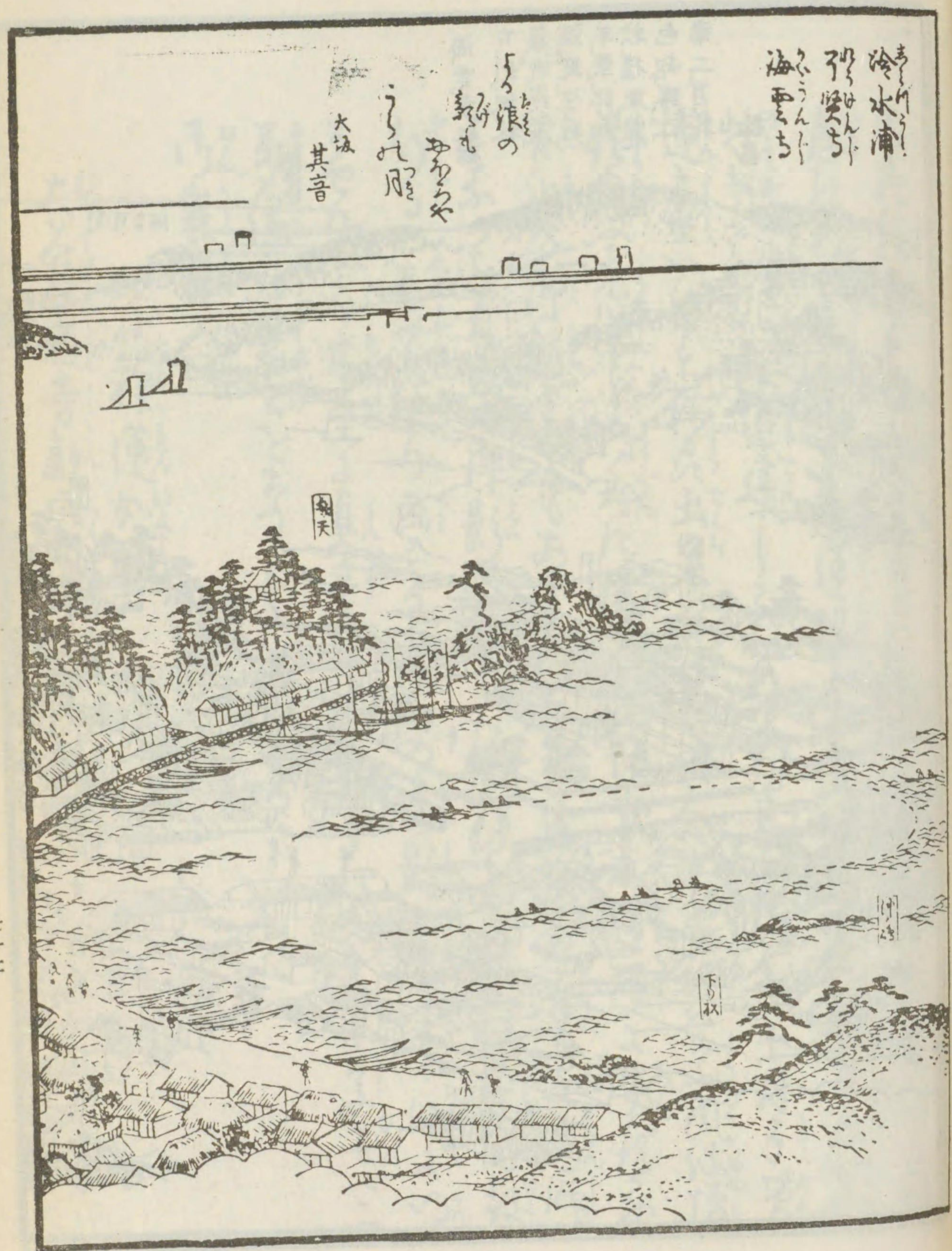












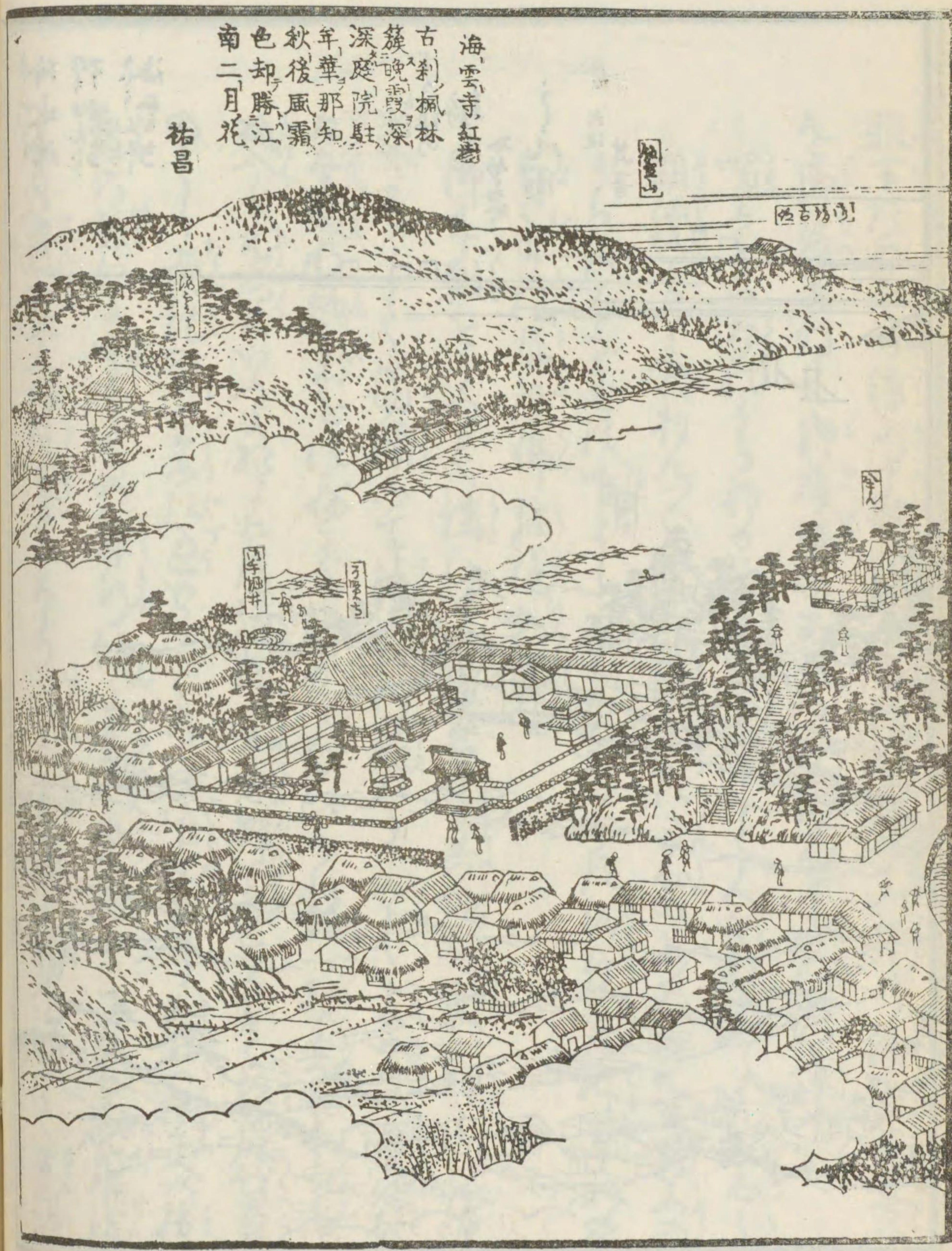
冷水浦  
 不登寺  
 海軍

大坂  
 其音  
 其音

眼下の冷水浦の後の草山登る浦を風景  
 を沖流あつて沖流のありあつていなる  
 唱をいおれうらめる極楽の遠く人やおつらん  
 相續する人おわらんくは佳境の心もあつても  
 うらなままに唯うーあしをうらなれは外を  
 あり世河跡陀佛跡地如來  
 手組とうらまはしる中を其地と細くし  
 まよりうらまはしる中を其地と細くし  
 力本領の勢をいおれうらめる極楽の遠く人  
 入るうらまはしる中を其地と細くし  
 のうらまはしる中を其地と細くし  
 者おれうらまはしる中を其地と細くし  
 うらまはしる中を其地と細くし



海雲寺、紅樹、古刹、楓林、深院、翠深、年華、那知、秋後、風霜、色却、勝江、南二月、花



ちりぬげのふもあまのそと日けりけりへぬもたかひたれが  
 急んじが念念とて道場と山林とよも飯堂と  
 のき町西少々に造連しとほりて其の年の十月子  
 連たまはとほり出まるとよ上人へととる定月海傍  
 莊月ふえ儀し月城に流るともも未道場よ安ん  
 寂然の沖影もあまのそと日けりけりへぬもたかひたれが  
 とふりて自画の沖影と知したまひて日けりけりへぬもたかひたれが  
 けりけりへぬもたかひたれがけりけりへぬもたかひたれが  
 させんとも居座よ真を毫と深させし九字十字并二  
 尊像乃裏ととてうとて終つたり

禪蓮如判  
 大谷本願寺親寫西人沖影































山中雄

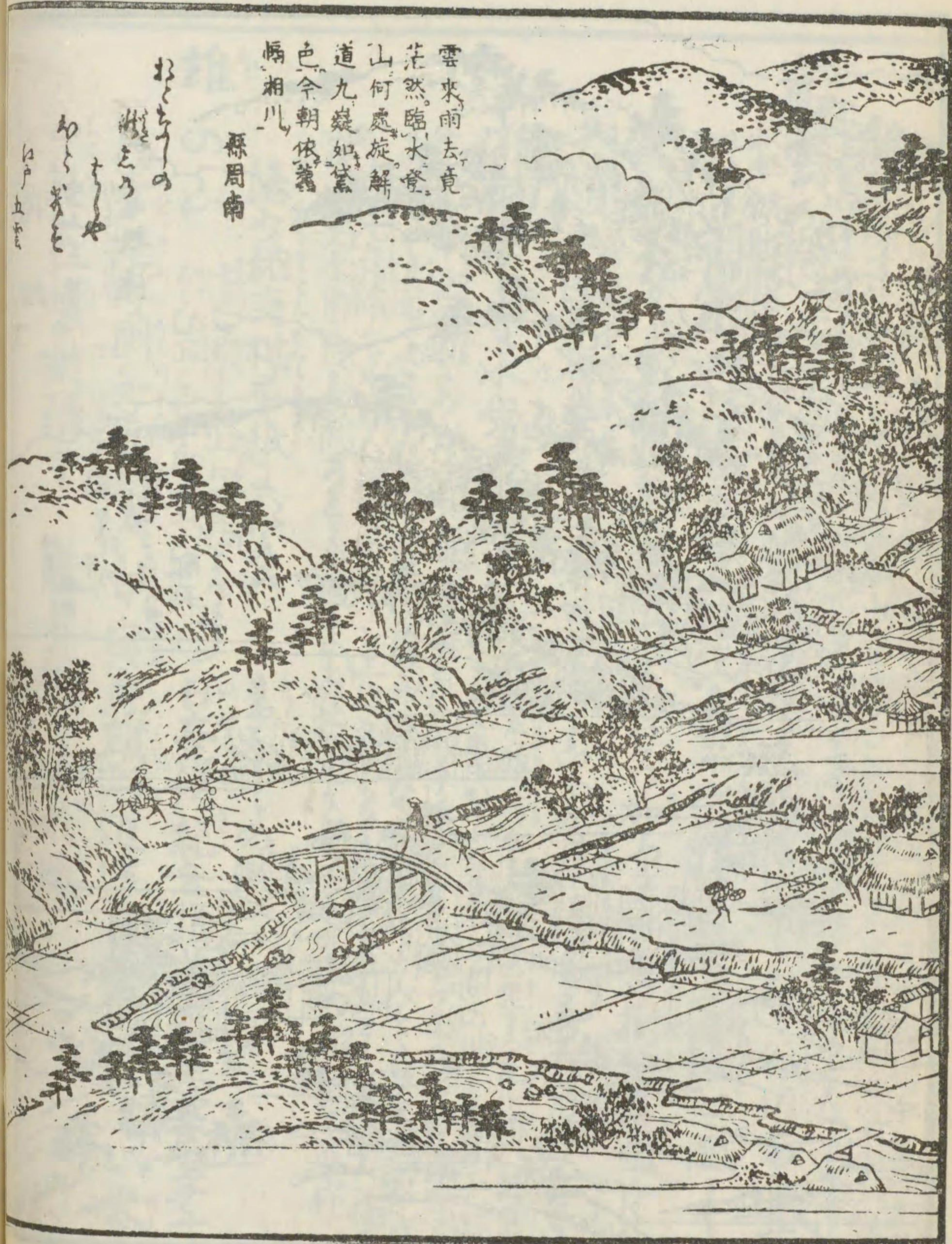


七二〇

雲來雨去竟  
茫然臨水登  
山何處旋解  
道九疑如紫  
色今朝依舊  
橋相川

孫周南

おもしろ  
い  
わ  
か  
り  
な  
い  
な  
ら  
ば  
い  
や  
い  
や  
い  
や



七二九

































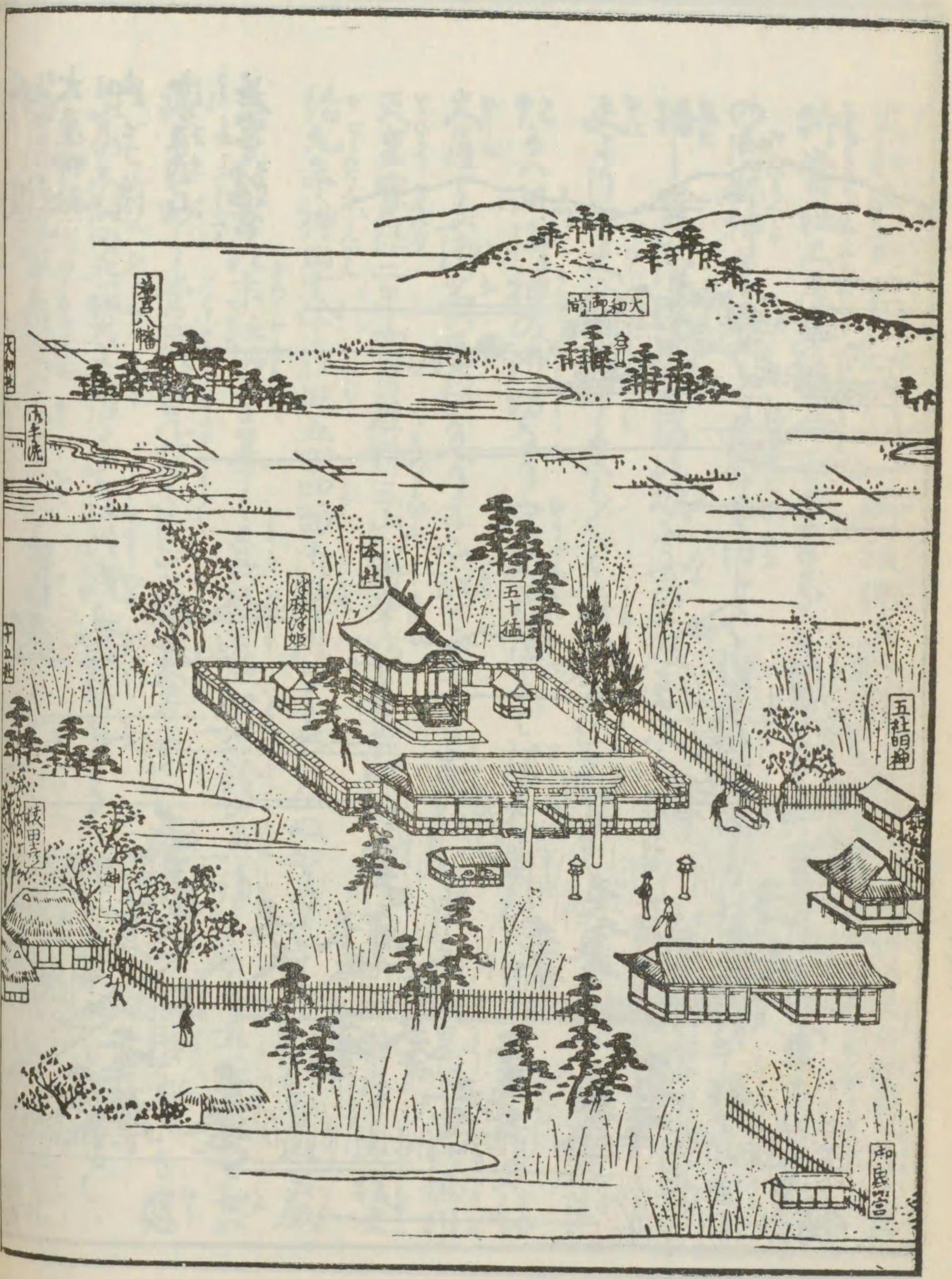


大和御前社川村村あり 御後納山其郷伊を根曾御御津御津分進あり  
 抑當社大屋都姫命とよみ 郡山東庄はらふ 坐ま 伊太都曾い 神かみ  
 の御妹神みむすめ よはして見命みこと と同おな 樹木種こゝろ と夫おつ たりりり いい 始はじめ て此國このくに よ  
 播はら 一ひと の御法ごうほう せはほは故ゆゑ 小玉こたま の名な も小の國このくに とと 元もと 帝みかど の御制ごせい 小園こゝろ て紀き の音ね の  
 まま たりして大八洲國おほやまと 中なかつ よもくくく 海植うみうゑ 多おほ いて野の も山やま も青あお くと草くさ 木の世よ  
 たる此御神このみかみ の御功ごこう あり宮殿みやてん 民屋たみや まで材木まいたけ と用もち いて造つく ることあり多おほ け  
 大屋おほや て御名ごな の負お ひ多おほ かりとて上下かみしも も崇教たかみち やはは して大皇おほみかど 七十三代しちじゅうさんだい 堀川ほりがわ  
 天皇てんかう 實治二年じつちにに 四月しがつ 慈野じの 三山さんざん 御幸ごきやう ちをを 小内こうち 當社とうしゃ にも御奉幣ごほうへい ちり其後そのち 去さ  
 治元ちげん 年ねん 神田十八丁かんだじゅうはちぢやう 社池しゃいけ 五丁ごぢやう 四面しめん 御寄附ごよせつ ちをを せりぬかぬか じりじり 社しゃ 改かへ の莊むら 嚴げん  
 きき びやに末社すえしや ちをを 奉ほう ぐ直ちか 日ひ 巫祝いそぎ の冷ひや の声こゑ 淨じやう じて身み と東あづま せ板いた  
 夜よ もとわく常とこ 夜よ の光ひかり 煌きら じて眼まなこ と雀すずめ 入い じも輪りん 奘そう ちり宮みや 居い ちりしも應おう  
 永えい の大乱おほいらん の兵へい 勢せい 大おほ 雁かり まで社しゃ 残のこ らば鳥とり 有あ ちりりり 僅わずか ち其その 十じゅう ぐと存ぞん と云い へ  
 當社とうしゃ の祝家いのけ 赤あか 氏うぢ の大屋おほや 彦ひこ ちりお債せう じて今いま 迄まで 八十三代はちじゅうさんだい 連綿れんめん ちりり 妻つま へ社しゃ 家のけ  
 同どう 池いけ ちりりり

神波  
 大屋神社  
 御手洗  
 御後納山  
 若宮八幡宮







伏見山永正寺

西本願寺の別当  
 伏見山永正寺の別当  
 西本願寺の別当

本寺阿彌陀如来

法華經の御書  
 寺の御書  
 法華經の御書

總社明神

甲斐守  
 甲斐守

田井庄四ヶ村の産神にて毎歳九月十八日祭あり  
 田井庄四ヶ村の産神にて毎歳九月十八日祭あり

十五社明神社

日蓮西村ありまろの社素盞鳴るる毎歳六月十二日祭あり  
 日蓮西村ありまろの社素盞鳴るる毎歳六月十二日祭あり

紀の川

水鏡村南五町あり船渡りて川の直二十餘丁南岸に  
 水鏡村南五町あり船渡りて川の直二十餘丁南岸に

紀の川  
 水鏡村南五町あり船渡りて川の直二十餘丁南岸に  
 紀の川

















高良明神社 日村の南上の  
 齒観音 ありと云ふ  
 圓上寺旧地 ありと云ふ  
 十五社明神 田屋村あり  
 梅松山山法寺 日村あり

高良明神社 日村の南上の  
 齒観音 ありと云ふ  
 圓上寺旧地 ありと云ふ  
 十五社明神 田屋村あり  
 梅松山山法寺 日村あり

高良明神社 日村の南上の  
 齒観音 ありと云ふ  
 圓上寺旧地 ありと云ふ  
 十五社明神 田屋村あり  
 梅松山山法寺 日村あり



